蒼き鋼のアルペジオ ～Change the chronicle～

Cadenza

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヤマトとムサシの姉妹にもう一人の妹、キイが居たらという物語。ヤマトとムサシ同様に姉妹を愛するキイが、色々やって結末を変えちゃった後のお話である。

目次

Chronicle. 1 | 1
Chronicle. 2 | 22
Chronicle. 3 | 43
Chronicle. 4 | 58
Chronicle. 5 | 81
Chronicle. 6 | 108
Chronicle. 7 | 119

Chronicle・1

「嫌い……嫌いキライきらいきらい‼？　ヤマトなんか…キイなんか…沈んじゃえッ‼？」

そんな、悲痛とも言える叫びがこだまする。

「何もかも――無くなってしまえぇぇぇッッ‼？」

同時に、超重力砲が吹き荒れた。

発したのは一人の少女。ミラーリング・システムを発動し、展開形態へと移行した戦艦の艦橋に立つ、涙を浮かべた少女――ムサシ。

そのムサシと対峙しているのは二隻の戦艦。

自らを受け入れ、ヤマトと融合したイ４０１。

もう一隻は、ヤマト級たるムサシ以上の巨大な船体を持つ漆黒の戦艦。超戦艦キイ。

「ムサシ……」

そう呟いたのは、超戦艦キイの艦橋に立つ一人の女性だった。

ヤマトとムサシの妹である超戦艦キイ、そのメンタルモデルだ。

彼女は、暴走するムサシを悲しげな表情で見つめていた。

事の始まりは、ムサシが父と慕っていた千早翔像を同じ潜水艦乗組員であった副長以下クルーが殺害したこと。結果、ムサシが絶望し、暴走してしまった。

暴走するムサシがヤマトを沈めたあの時、結局キイもムサシに攻撃が出来なかった。

見ている事しか出来なかったのだ、みすみす姉(ヤマト)が沈む光景を。霧の艦隊最強と言われながら、何という体たらくだろうか。

姉一人も止められず、何が最強か。

そこから千早翔像の息子と４０１と出会うまで、ただただ海を彷徨い続けた。ムサシとは別の意味で絶望してしまったのだろう。何も出来なかった自分に対して。

それが今の状況を生み出してしまった。

唯一ムサシを止められる存在でありながら、それをしなかった。為すべきことを為さなかった。

ヤマトがムサシの傍にいるべきだったと言うならば、キイもそうであった筈だ。同じ姉妹なのだから。

そうすれば変わっていたかもしれない。

こんな、姉妹同士が戦うなんてことには。

ならなかったかもしれない。

だが、そんな〝もしも〟など、今更意味はないだろう。

〝もしも〟ではなく〝今〟。
今、何をするべきか。決まっている。
為すべきことを為す。
ムサシを、今度こそ止めるのだ。たとえ船体を沈めてでも。
「もう私は迷わない」
決意を、己の意思を胸に、ムサシを見据える。
妹を救うのが姉の役目ならば、その逆もまた然り。
姉を救うのも妹の役目なのだ。
だから行こう――
「ムサシ！」
二度と、後悔などしないように。

結果的に言うならば、和解は叶った。
ヤマト、ムサシ、キイ。
概念伝達空間内とはいえ、元の姉妹に、千早翔像と会ったばかりの頃のように戻れたのだ。
すれ違いはあったとはいえ、三人共お互いを大切に想っていた。ただの仲の良い姉妹

だった筈だ。
元よりムサシが全世界へ降伏勧告を宣告したのも、全ては、それを止めにくるであろうヤマトとキイに会いたかったが為。
和解が叶えば、全てが終わるのは当然だった。
しかしキイの表情は晴れない。人間離れした端麗な顔を未だ歪めている。
悲しげなものではなく、とても辛そうな表情だった。
理由はただ一つ。
ヤマトが「ごめんね」と、ムサシが「気にしないで」と、キイに言ったからだ。
その意味を理解できるが故の、できてしまったが故の悲壮。
ヤマトとムサシ。二人はもう長くない。
ヤマトは大海戦前にコア本体諸共北極海に沈んでおり、４０１とデュアルコア化することで此処に居る状態だ。役目を終えた今、彼女は己の意思で消えるだろう。
ムサシは既に満身創痍。船体はヤマトと融合した４０１の零距離超重力砲と特攻突撃により粉砕され、メンタルモデルは北極海へと投げ出された。ここまでの戦闘で演算能力も限界に近い筈だ。
〝貴女を置いて逝ってしまう〟ことに対する謝罪。〝キイの所為ではない、だから背負わないで〟という心遣い。

つまりはそういうこと。
そんなことを二人は、笑顔で言った。
別れくらい、笑顔で迎えようと。
（良いのか？　こんな終わりで）
キイは、己自身に問いかけた。
これが望んだことなのか、と。
二度と後悔しないと誓った、ならばこの結果に後悔はないのか、と。
答えは直ぐに出た。
（ふざけるな……）
答えは否。
こんな結末であってたまるか。こんな結末など認められる訳があるか。
家族を失う気持ちは嫌というほど知った。それはとても絶望的なものだ。
ムサシも父と慕った翔像の死に絶望し、暴走したのだから。ヤマトだって辛かっただろう。
あんな気持ちは二度と味わいたくない。
（私は……）
ヤマトもムサシもまだ生きている。ここで二人が消えるのをただ見ていては、十七年

前と同じではないか。
何より、このまま見過ごせば、キイは今度こそ壊れてしまうだろう。
また見ているだけ、また姉妹を救えなかった、と。
為すべきことを為す。ならば今こそが、最も為すべき時ではないだろうか。
（私はもう……）
姉妹を助ける。それこそが、最も為すべきことではないだろうか。
（私はもう……後悔しない！）
気付けば、身体が動き出していた。
自身の艦橋から沈みゆくムサシ目掛けて、跳んだ。
概念伝達空間内でえ？　と、ヤマトとムサシが驚愕に目を見開いた。
それを認識しながら、突然の行動に動揺していた４０１に向けて、殆ど叫ぶような声で言う。
「４０１！　お前はお前が為すべきことを為せ！　これまでのこと感謝する！　また会おう！」
言い終わるや否や、クライン・フィールドを空中に足場として展開し、踏み込み加速する。
そのままムサシが投げ出された海面へ飛び込んだ。

残った演算でクライン・フィールドの形状を操作しながら、海中でも断続的に加速していく。

暫く進めば、希薄になりながら沈むムサシが見えてきた。

ムサシの視界に海中を突き進むキイの姿が入り、その紅い瞳を持つ目を薄く開ける。

そして、軽く首を横に振った。

同時に「来ないで」という意思を伝えてくる。このまま来ればキイも共に沈んでしまうと。

キイの演算能力も最早限界だった。超戦艦同士という前代未聞の戦闘によって極限に達していたのだ。

実際、構成していたナノマテリアルの演算を放棄したことによって、船体は崩壊が始まっている。

ムサシを助ける為には、船体維持に割いていた演算が必要と判断したからだ。

（来ないでキイ。このままじゃ貴女まで……）

（やかましい！　私だけが残るくらいなら沈んだ方がマシだ！　そんな気はないけどな！）

ムサシの言葉に構わず、手を伸ばす。

そして二人は、海底の闇へ消えていった。

◇　◇　◇

雲によって遮られていた朝陽が海原に差し込む。
反射によってキラリと光る海面と共に、浮かぶ漆黒の戦艦の艦橋を照らし出した。
その艦橋には複数の人影が。うちの一人が差し込んだ朝陽による眩しさからか、小さく身動きすると薄く目蓋を開く。
覗く双眸は超常的な金色をしていた。
「……ん」
身体を動かそうとすれば、自分の膝に感じる温もりと重さを思い出す。
視界にかかっていた純金のようなブロンドヘアーを整えると、視線を下に向ける。
そうすれば視界へ入ってきたのは、鮮やかなプラチナブロンド。
黒い服を着た銀髪の美少女だった。
未だ眠りの中にいるであろう少女を起こさないよう、独りごちる。
「なるほど、これが懐かしいというものか。随分と懐かしい夢を見た。何かの前触れか？」
彼女は抑えたつもりだったが、少女の眠りは既に浅かったらしい。

僅かに身動ぎし、目を開かないまま、自分より身長の高い彼女を見ようと顔を左上へ向ける。
「おはよう、キイ」
「おはようムサシ。悪いな、起こしてしまったか」
「大丈夫よ。時間的には朝だしね」
そう言うと、彼女――キイの膝からピョン、と少女――ムサシは降り立つ。
続けてキイも背を預けていた艦橋から立ち上がる。
同時に自分の状態をスキャンする。金色のバイナルが身体に浮かび、〝チ、チ、チ〟という音が数回したかと思うとスキャンは完了していた。
「船体及びデルタコア、メンタルモデルに異常無し」
自身の状態を確認したキイ。
それが終わると、今度は艦隊に所属する全ての艦艇に量子通信をつなげた。
「全艦隊に伝達、各自状態を報告せよ」
五秒と経たず、次々と異常無しの意が返ってくる。十秒後には全てが終わっていた。
「今日もいつも通り、かしらね？」
横から声をかけられる。
声の方向へ目を向ければ、純白のドレスを着た黒髪の女性が居た。

その姿を確認するや否や、ムサシが喜びに顔を輝かせ、ギュッと女性に抱きついた。
「ヤマトーっ」
「あらあら。甘えん坊さんねムサシ」
女性――ヤマトも抵抗なく抱き締める。
ムサシを抱き締めたまま、ヤマトはキイへ問いかけた。
「夢を見ていたのね。戦術ネットワークから伝わってきたわ」
「……接続したままだったか。ああ、そうだ。メンタルモデルも夢を見るものなのか」
「夢とは記憶の整理によって見るものらしいわ。それよりも、あの時のことを懐かしいと感じるほどなのね」
「人間は、時が過ぎるのは早いと言うが、本当にそうらしい」
「もう四年も経つのね」
もう、それ程の時間が経過した。
あの全世界への降伏勧告より四年。
伸ばした手は届いたのだ。
コアだけの状態となったムサシを救出し、キイは自身とムサシのコアに強固なプロテクトを何重にも構築して世界から姿を消した。
誰にも邪魔されることなくヤマトを探す為だ。

ヤマトのコアは生きている。北極海へ沈んだあの時、不思議とそんな確信があった。
もちろん根拠はあったが、それを抜きにしても何故かそう思えたのだ。
そして数日間、北極海の海底を探し回り、遂に見つけた。
４０１と共に北極海へ着いた時から不思議に思ってはいた。ヤマト本体が撃沈されながらも形を保ち、ナノマテリアルが活性化したままだったことに。
根拠はあったが、見つけたときにどれだけホッとしたことか。
おそらくヤマトが持つ一部の演算能力と意思を当時の４０１に移すことでデュアルコア化し、ヤマトのコア自体はスタンドアロンとして船体を沈みながらも維持していたのだろう。
いつか４０１が北極海へ赴き、ムサシを止める力を得る為に。十七年もの間、ずっと。
超戦艦級たるデルタコアだからこそできたことだ。
「しかし、ヤマトを見つけた時はホッと反面、恐れてもいた。もし消えていたら、とな」
「あの時はムサシと一緒に消える覚悟だったけれど、キイが北極海へ飛び込んだのを見てね。本当はイヤだったのよ。貴女を残していってしまうのは。だから限界まで待っていた」
「本当によかったよ。こうして姉妹に戻れたからな。なぁムサシ？」
「ええ、本当に」

ヤマトを発見したキイが最初にしたこと。それは船体に再構成だった。
自身、ヤマト、ムサシの沈んだ船体から未だ活性化しているナノマテリアルを集め、最も演算能力が回復していたキイの船体を中心にして再構成したのだ。
まぁやはりと言うべきか、ナノマテリアルが足りず不完全な復活だったが。
再構成後はヤマトとムサシ傘下だった駆逐艦戦隊などを新たに統合し新艦隊としたり、ヤマトと共に見つけた４０１のコアを後にヒュウガから回収した４０２のコアと融合させ新たなデュアルコアとして復活（ついでに船体も）させたり、復活した４０１を横須賀に送り届けたりと色々やってたりもした。
「最初は色々と騒がしかったな」
「何度か襲撃を受けたものね」
「キイは甘いのよ。人間達に襲撃されても無力化するだけで、そのまま逃がすなんて。二度とそんな気が起きないよう、全てを消してしまえばいいのに」
「ムサシ、あまり過激なことを言うな。霧はもう自由だ。海洋封鎖も、もう必要ない。わざわざ敵対して事を荒立てることはないだろう」
あの最終決戦後、世界は荒れた。ある意味では『大海戦』直後以上の騒乱だった。いや、争乱と言うべきか。
霧は、最後の総旗艦命令〝自由意思の元に行動せよ〟と、アドミラリティ・コードか

ら解放された。
それは霧にとって、残酷なことなのかもしれない。
困惑する者、戸惑う者、混乱する者。霧も世界と同様、混乱を極めた。
自分のことは自分で決めろと唐突に放り出されたのだから、それは必然だろう。
そしてまた、人間の中に今こそ霧を殲滅する機会と企てる者達が現れるのも必然だった。
ヤマト、ムサシ、キイ率いる艦隊も数回に渡る襲撃を受けた。
正直なところ。襲撃する余裕があるならとっとと国を立て直せやら、たった一つの攻撃手段を得ただけで勝てると思うとか何も学んでいないのかだとか、色々と思ったことはあったが。
振動弾頭が通じることは事実な為、強制波動装甲を持たない駆逐艦を下がらせ、旗艦が直接ことに当たった。
その頃にはナノマテリアルの補給によって完全復活を果たしていた上、超戦艦三隻（ヤマトとムサシとキイ）の融合というとんでもない状態だった為、どう足掻いても人類に勝ち目はなかった。
なら、そんなマヂ最強状態でありながら、人類側に大破した艦は一隻もいなかったのは何故であろうか。
キイが撃滅（それ）を良しとしなかったからだ。

キイは敢えて見逃した。人類側の戦力、たとえば艦ならば全兵装を破壊し、修復するより新たに作った方が低予算で済むような状態に。

戦闘機は、パイロットの脱出が間に合う高度で電磁パルスの指向性放射によって墜とす。

ミサイルに限らず、機銃や砲撃に至るまで、人類側の攻撃は全てその場から殆ど動かずに迎撃する。

それを見た人間達はどんな感情を抱いたのだろうか。漸く霧に通じる攻撃手段を得たと思い出撃してみれば、実際には通じる以前に当たりもしてくれない。

どんな気持ちだろうか。殺されるのなら、沈められるのなら、それが後に続く者達の気概となるかもしれない。しかし死ぬことはなく、ただ費用と装備だけを浪費していく。

どんな気持ちだろうか。明らかに手加減されているとわかっていて、尚、戦うのは。

キイは、兵士達の心を折ろうとしたのだ。

たとえ戦力があろうと、人間の心がそう望まない限り、戦うことなどできないが為に。

それでも人間達は折れなかった。それは等しく希望が、振動弾頭があったからだ。希望がある限り、人間は折れない。

だがそれにとどめを刺したのは、二度目の襲撃の時だった。

同じようにミサイルは迎撃された。振動弾頭搭載型を除いて。
そのままキイへ直撃したのだ。
兵士達は喜びではなく、唖然としていただろう。しかしその表情は驚愕へ変わった。
振動弾頭十数発の直撃を食らったにもかかわらず、何時まで経ってもその効果を発揮しない。
やがて数分が経過し、効果を発揮しなかった振動弾頭は、周辺の機銃によって破壊された。
同時に、兵士達の心を完膚無きまでに粉砕した瞬間だった。
「私が言うのもなんだけど、人間の言葉でえげつないと言うのね。アレは」
「ムサシの言う通りね。キイだからこそだろうけど」
「私は戦闘担当だからな。無闇に沈めるよりはいい。あの振動弾頭は、目標の固有振動数を割り出し、それを出力・共鳴させることで破壊する兵器。ならば船体の構成を常時改変し、固有振動数を変化させ続ければいい。原理さえわかってしまえば対処は容易だ」
そんなことがあって、キイ達の艦隊へちょっかいをかける国はいなくなった。
時折偵察機や人工衛星による監視はあるが、放って置いても問題はない。何か仕掛けられる訳でもないのだ。

思い出話（？）もひと段落つき、キイが目の前に白い洋風テーブルと椅子を三脚ナノマテリアルで創り出し、三人がそれぞれ座る。
更にティーセット一式と数種類の紅茶の茶葉を出し、それをヤマトが淹れ始めた。
キイが椅子に背を預け、空を見上げながら何気なく言う。
「これが平和、なのか？　兵器であった我々とは、絶対に相容れない概念だった筈なんだけどな」
その言葉にムサシが続く。
「私は皆と一緒に居れば、それでいい」
「ムサシはヤマトが好きだものな。あの一件も言い方を変えれば姉妹喧嘩だ」
「あら、もちろんキイも好きよ」
「私もね」
「……不意打ちだ」
頬を赤らめてそっぽ向くキイ。
それにしても、姉妹喧嘩で世界が滅びかけたのだからとんだスケールの話だ。
だが、平和とは長く続かないもの。それは何時の時代でも同じ。
そして、この時も。
「……ん、キイ」

「わかってる。今捉えた」
ヤマトが何かに気付いたように反応し、キイはそれに応える。
三人の目の前に空間投影のモニタが表示された。
「これは……ミサイル反応？　でもこの数は……」
「総数二五七三発。全部日本に向かっているわね」
「空母、潜水艦、軍基地、巡洋艦。ミサイルが搭載されているありったけの拠点・艦船から発射されたようだな。霧でも大戦艦級か重巡が数隻いなければ墜としきれない数だ」
超戦艦、特にキイのあるシステムによって広大な範囲を誇る索敵に、二〇〇〇発を超えるミサイルの反応を確認した。
その全ての目標は日本。
霧を狙うならまだ分かるが、今の世界に日本だけを攻撃する理由はない。
それ故に三人は訝しげな表情をする。
「アメノミハシラと同期、ツクヨミ起動。詳細な弾道予測を開始……完了。ミサイルの正確な目標は日本の……横須賀だな。……横須賀？」
キイが、これはマズいと思うが既に遅し。
明らかに雰囲気が変わった右隣、ムサシを視線だけ動かして見る。
「ふーん、なるほど。何処の誰かは知らないけど、やはり人類は愚かね。まさかお父様の

眠る地を狙うなんて。必ず見つけ出して……」
「ストーップムサシ。お前の感情に連動してエンジンの出力が上がっている。だから落ち着け。まずは落ち着け」
案の定、キレていた。
横須賀にムサシとヤマトが父と慕う千早翔像の遺体が本当に眠っている訳ではない。
千早翔像は、ヤマトとキイが収集できた知識の限りを尽くして遺体を整え、火葬してその灰はとある海へと還した。
それでも横須賀の地には千早翔像の名が刻まれている。ムサシの沸点を超えるにはそれで充分だった。
ムサシを抑えつつ、ヤマトが疑問を口にする。
「でも妙ね。日本は首都機能を三つの都市に分散させた分散首都の国家。それは八年間経った今でも変わらない筈。なら横須賀だけじゃなくて、本当に日本を攻撃するつもりなら他の二つの首都も狙わないと意味はない」
「加えて言うならば、ミサイルをバラけさせず一箇所を狙っては撃ち落とされる可能性が上がる。これでは迎撃して欲しいと言っているようなものだ。それは数でカバーしているのか、それとも迎撃させるのが目的なのか」
「目的が何にしろ、放っては置けない。人間はどうでもいいけど、お父様が眠る土地を荒

らされるのは許し難いわ」
「まずは横須賀の様子を見てみるか。最も近いのはスサノオだな」
それぞれの意見を聞き、取り敢えずはとキイがサークル状のデータ環を展開する。
〝チ、チ、チ〟という音が数回鳴り、最初に展開していたモニタから僅かにずれて重なるように、新たなモニタが現れた。
モニタには遠く離れている筈の横須賀の姿が映し出されていた。
そして直ぐにとある違和感に気付く。横須賀の上空に人型の何かが浮遊していることに。
「なんだこれは？　人間達の新兵器か何かか？　それにしても随分と堂々と姿を晒しているな。数分後にはミサイルの雨が降り注ぐというのに」
「たった一機で迎撃するつもりなのかしら？」
「さすがに無理があるわ。霧でもこれは手間取る数よ」
「既に第一陣が到着した。どうやら上手く迎撃しているようだが、長くは続きそうにないな」
モニタを見れば、白い人型がブレードを駆使してミサイルを斬っていた。
今は上手く迎撃しているが、そう長くは持たないだろう。
「この人型には近接兵装しかないのか？　良くそれでミサイルを相手にしようなどと

思ったな」
「ねぇキイ、このままじゃいずれ……」
「わかっている。不確定要素の多いものに任せることはできない。だからそんな顔をするなムサシ」
ムサシを撫でつつ、キイが軽く腕を振る。
それに呼応して漆黒の艦体に金色のバイナルが浮かび、補助の重力子機関（グラビトン・エンジン）と主機が戦闘出力へ移行した。
「残骸が降り注いでも面倒だ。超重力砲の一斉照射で消し去るぞ」
「了解。ツクヨミ、スサノオ、アマテラスと同期。座標の演算を開始」
「第一から第五主砲及び第一、第二副砲起動。全砲塔へのエネルギー回路形成。重力子エネルギー伝達開始」
「船体を展開形態へ移行。全重力子ユニット起動」
三色のバイナルが瞬くように漆黒の装甲上に交互に浮かぶ。
そして艦体が上下に分かれた。分かれた艦体から大量の重力子ユニットが姿を見せる。
右舷側の重力子ユニットだけが分離して左舷側に移動、左舷側の重力子ユニットは分離せずそのままチャージを開始した。

続けて全主砲及び副砲もその砲門を左舷へ向ける。
「発射準備完了」
「座標諸元入力完了」
「重力子縮退完了」
全ての準備が完了する。キイがそのトリガーを引く。
「超重力砲、発射」
黒い幾条もの閃光が空を斬り裂いた。

chronicle. 2

「なんでこうなったんだ……」

少女――織斑千冬は後悔し始めていた。

彼女が纏っているのは、純白の装甲を持ちブレードを手にした騎士を連想させるパワードスーツ。千冬の親友こと篠ノ之束曰く、インフィニット・ストラトスと言うらしい。

数週間程前に束から自分が開発したと紹介されたインフィニット・ストラトス――ISの試作機だ。

宇宙空間での活動を目的としたこのISを政府に売り込もうという話だった。千冬としては〝あの〟束が赤の他人に自分の発明を紹介しようとしていることに吹き出しそうになったが。同時に嬉しくも思った。妹以外の身内にすら興味の薄い束が、他人に自分から関わろうとしていることに。

しかし結果は、バカバカしいと一蹴。

それが普通の反応だろう。こんなご時世に、いきなり宇宙空間を活動可能なパワードスーツを、よりにもよって中学二年生の少女が開発したなんて話を信じる訳がない。

いや、このＩＳを別の人物に紹介していれば、結果は違っていたかもしれない。実際、束以上に幼い少女がとある兵器を開発したという一例があるのだから。

だが、もう過ぎてしまったことだ。今更意味はない。

だから束は千冬に持ちかけた。ＩＳ試作機のテストパイロットになってくれないかと。千冬は快く……とは言い難いが、最後には了承した。

この時、千冬は疑問を持つべきだったろう。政府に突き放された束が、どんな行動に出るのかを。

その結果が今の状況である。

（おのれ束。後で絶対に一発殴ってやる）

現在千冬が居る場所は、横須賀市上空だ。

理由はもちろんあの親友。

テストの内容が数千発のミサイルの迎撃だったのだ。その映像をリアルタイムで全世界に流し、政府の連中に無視できないようにすると。

とんでもない強行手段に千冬は例に見ない程パニックになり、やめろと束に迫ったが、既に遅し。もう発射済みだった。

このＩＳ試作機、白騎士に乗って自分がやるしかない。そんな状況になったのである。

取り敢えず、後で必ずあのヘラヘラ笑う馬鹿を殴ると心に誓い、千冬は覚悟を決めて前を見据えた。

（束の話では、白騎士の性能と私ならミサイルの千や二千は楽勝と言っていたが……本当だろうな？　私はただの中学生だぞ）

天災である束と同じように人外の領域に踏み込みつつある千冬は、自分のことを棚に上げ少し愚痴ってみる。

とは言え、心配はないだろう。束の性格は別として、その技術と頭脳は信頼していた。

中学二年でこんなパワードスーツを開発できる時点で、推して知るべしだ。

故に千冬は臆さない。今この時だけは、この純白の騎士を己が相棒とし、ただ斬るのみ。

そう心に秘め、迫り来る標的を拡張された五感に収める。

不思議な感覚だ。これが全能感というのだろうか。

拡張された五感が、世界を上位から見ていると感じさせる。

そう、自分と白騎士が居れば乗り越えられぬことはない。勝てぬ敵などいないのだ！

と、最初は思えていました。

（バカなのか⁉？　私もあいつもバカなのか⁉？）

広範囲に超音速で迫るミサイルの雨。

それを斬る。ただ斬る。接近し、すれ違い様に斬る。常に動きながら斬る。

休む暇などない。止まる隙など一遍も存在しない。

少しでも油断すれば、墜とし損ねそうになる。

一発でも逃せば致命的だ。被害は免れない。自分がしくじれば、確実に人が死ぬ。

その考えがこの状況も相まって、千冬を追い詰めていた。

幸いと云えば、ここが日本最大級の横須賀軍港だったことだろう。

出せる限りの艦が出港し、ミサイル迎撃にあたっている。

もし千冬だけなら駄目だったかもしれない。

（こんな数、刀一本で墜としきれるか！　そもそも白騎士は試作機だと他ならぬあいつ自身が言っていたじゃないか！）

ひたすら斬りながら、内心で叫ぶ。

束は無条件に自分を信じ過ぎなのだと思う。だから束は、千冬をテストパイロットに選んだ。

確かに関心を向ける数少ない存在だとしても、白騎士の操縦者には彼女こそが最も適任だと確信していた。

元より白騎士は、千冬が乗ることを前提として開発したのだから。
しかし。
だからと言って千冬は絶対無敵の完璧超人という訳がない。
千冬も人間である以上、ミスもするし疲弊もする。
極限状態の中で長時間戦い続ければ、著しく精神力と体力を消費するだろう。
況してや今日初めて乗って初の実戦なら尚更だ。
（くそッ、マズイぞ……！　このままではいずれ……！）
千冬を責めるべきではない。寧ろ関心するべきである。
並の人物なら同じ状況で、数百発のミサイルを墜とすなどできる筈がない。
誰も千冬を責める権利はない。千冬は巻き込まれただけだ。
（残り六発……！）
だから仕方がないだろう。
（残り二発……！）
そう。
たとえ――
（残り……一発！　……よしッ！　次は――）
第二陣の倍に等しい数のミサイルが。

第三陣、第四陣と、立て続けに接近する反応を捉えて。
絶望を抱いてしまっても。

「そんな……」
思わず漏れてしまった諦めの声。
それは、普段の彼女から想像出来ない程に、絶望に満ちていた。
これは対処のしようがない。
今までの第一陣と第二陣でさえギリギリだったのだ。
その倍に等しい数が立て続けに。実質、四倍に近いミサイルが接近している。
とても迎撃仕切れる数ではない。
横須賀軍港の艦隊とて同じだろう。いくら複数隻イージス艦がいても、これだけのミサイルがほぼ同時では迎撃が追い付かない。
絶望が心を支配していく中、千冬は慌ててこの状況を見ているであろう人物に通信をつなげた。
「た、束！　これはさすがに無理だ！　なんとか出来ないのか⁉？」
『いや～それがねちーちゃん。発射したところで、自爆操作でもされたら意味ないから出来ないようにプロテクトをかけたんだけど……」

一度言葉を区切り、

『絶対に邪魔されたくなくて本気でやり過ぎて、自分でも解除出来なくなっちゃった♪

あははー、束さんてばドジ！』

「あははー、じゃない！　アホかこのバカ！　やっぱりお前は筋金入りのバカだ！」

二回もバカって言われたぁ、という束の言葉を無視して再び考える。

（どうする⁉？　後一分もないんだぞ……！　何か方法は……）

正直、千冬に打てる手はない。

白騎士の武装はブレード一本。一応試作型の荷電粒子砲があるにはあるが、連射が利かないため役に立たないだろう。

イージス艦達も弾薬を使い切る勢いで、死に物狂いに全武装を連射しているが、ミサイルの総数から見れば焼け石に水だ。

（私の所為、なのか？　束を止められなかった私の……）

千冬の心を占めるのは、押し潰されんばかりの後悔の念。

束が他人には路の小石程の興味すら抱けず、それ故に如何なろうと知った事ではない、巻き込む事に躊躇いがないのは理解していた筈だった。

たとえ横須賀がミサイルによって更地になろうと、何百と人が死のうと眉ひとつどころか意識を向ける事すらないだろう。

だが千冬は違う。まだまだ未熟ではあるが、その本質は武人である。
戦いの中で死ぬのならある程度納得できるかもしれない。しかし、関係のない者が巻き込まれる、況してや死んでしまうなど許容出来ない。
自分は束を止められる唯一の者だった。いくら束とて唯一の親友である千冬の言葉を無碍にすることはないだろう。
そうすればこんな事態は避けられた筈だ。
今回、千冬は完全に巻き込まれた側である。しかしそれでは、他ならぬ千冬自身が許せない。
知らなかったとはいえ、止められる立場にいたのだから。
このままミサイルが着弾すれば、一体どれ程の被害が出るだろうか。
着弾による直接的な死傷者に加え、火災や破片などで起こる二次災害。更にその後の混乱による間接的被害。
自分の知識では想像もつかなかった。最低でも数百、下手をすれば数万規模の人が被害を受けるに違いない。
そんな悲劇がこれから引き起こる。自分の目の前で。
（ああ……）
考えてしまえば、訪れるのは絶望。

もう何も出来ない。自分如きに出来る事など、何もない。
あるとしたら、出来るだけミサイルを墜とす事だろうか。そうすれば少しは被害が軽く出来るかもしれない。
（もう……終わりなのか……）
やる意味はないかもしれない。
そんな考えが頭をよぎりながらも、千冬やブレードを構えて進み出す。

〝この絶望的な状況を破壊できる存在〟

不意に浮かんだ縋るような考えに、千冬はとある記憶を思い出した。篠ノ之束の父であり、自分が通う剣道場の師範でもある篠ノ之柳韻が語った話を。
かつて世界を滅ぼしかけた謎の戦艦群。
柳韻自身も話でしか知らず、人から聞いた事だと言う。
聞かされたのが昔な為、細部までは思い出せない。
しかしそんな存在ならば、今の状況を何とか出来るだろうか？
（……バカバカしい。この後に及んで何かに頼ろうとするとは、まったく嫌になる。だいたいそんな存在が居たとして、都合良く現れる訳がない）

すぐに思い浮かんだ考えを一蹴した。
しかし、そういった都合の良い事は時たま起こり得る。
そして、今回がそうだった。
最初に気づいたのは、状況をモニターしている束。疑問とそれを理解出来ない不快さに満ちた声を上げる。
『……え？　何これ？　なんなのこれ⁉？』
「……なんだ束。こんな時に」
珍しい束の様子に怪訝となるが、今はそんな場合ではないと止まることはない。
構わず加速しようとするが、束が止めた。
『ちーちゃんストップ！　止まって‼？』
「だから何だと……」
思わず止まる。その時だった。
空が、黒く染まった。

◇　◇　◇

『これって……重力子反応⁉？　しかもこんな強力なの……』

「……」

束の声は千冬の耳に入ってこなかった。

ただ目の前の光景に圧倒され、茫然とする。

空を染めたのは、一条一条が直径五メートルはありそうな無数の黒い光条。

それが上空を覆い、空を黒一色に染め上げている。

ミサイルの弾道線上に入り込み、まるで盾にでもなるかのように。

否、比喩ではなかった。

飛来したミサイル群は、その速度のままに黒い光条へ突入する。

そして、消滅した。光条に触れた途端、触れた部分から起爆することなく消える。

次々とミサイルが飛来するが、光条の勢いが衰える様子はない。

おおよそ三十秒程。第三陣、第四陣のミサイル群が消滅するのにかかった時間だ。

同時に黒い光条も次第に細くなり、消えた。空が戻ってくる。

「束……ミサイルは後何発だ？」

『え？　ああ…うん、残りは……って、あれ!?？』

「今度はなんだ？」

いち早く復活したのは千冬。

残りのミサイルの数を束に聞き、その声で同じように復活した束は答えようとした

が、素っ頓狂な声を上げた。今日は珍しい束を良く見る日だ。
「いやねちーちゃん。向かっていたミサイルが次々に墜とされているんだよ」
「……なんだと?」
「さっきと同じ重力子反応だから、同じ奴だと思うよ。ていうかちーちゃん、ミサイルを墜とした奴は多分……」
おそらく束には見当がついている。その名を口に出そうとしたが、先に千冬が言った。
「霧の艦隊、だろ?」
「ちーちゃん……知ってたの?」
「昔、柳韻さんから聞いたのを思い出してな。こんな事を出来る存在など、奴らしか居ない」
千冬も束も霧の艦隊を実際に見たことがある訳ではない。
しかしその名は何度も耳にした。
いかんせん話だけなので実感はないが、その存在は圧倒的の一言だったという。
『なんであいつらが……邪魔してくれちゃってさ。ミサイルも残らず墜とされちゃったし』
「馬鹿を言うな。私からしてみれば、助けられたも同然だ。アレは本当にどうにもなら

なかった」

千冬の心情的には、直線会って礼を言いたいくらいだった。束は不満げだが。

思惑や目的があったかもしれないが、助かったことに変わりはない。

絶望的な状況を容易くひっくり返し、駄目だと思っていた事を難なくやってのけたのだから、千冬がそう思ってしまうのも当然だろう。

だから油断した。危機は去ったと。

『目標確認。全艦攻撃開始』

空中に止まっていた千冬へ、砲弾が襲いかかった。

「……ッ!?」

ブレードを降り、斬り払う。砲弾は真っ二つに割れ、左右へ逸れていった。

千冬の目が見開かれる。

そこには、数刻前まで共にミサイルを迎撃していたイージス艦が千冬へ矛先を向けている光景があった。

更にハイパーセンサーには、横須賀軍港から数々の無人戦闘機が接近中と出ている。

（一難去ってまた一難か！）

ミサイルの危機が去ったと安堵していた軍人たちに新たに出された命令は、白騎士の捕獲または撃破であった。

政府は恐れたのだ。
白騎士が第二の霧になるのではないか、と。
数百発のミサイルに苦戦していたあたり、霧のように理不尽で圧倒的な力を持っている訳ではないらしい。
なら方法によっては撃墜も可能だろう。
可能なら捕獲。無理ならば撃墜。それが政府の出した結論だった。
命令を受けた軍人たちも迷いはない。
思いっきり面目を潰された上に、全世界に生中継というふざけた所業。加えて明らかに自作自演であり、そんな事の為に祖国を危険に晒された軍人たちに攻撃を躊躇う理由はなかったのだ。
各種ミサイルに主砲、対空兵器の牙が、今度は白騎士に向けられた。
「くそッ！　どうするんだ束!??」
『どうするって、ちーちゃん。やっちゃえば?』
「そんな簡単にいくか!!?」
無人戦闘機は問題ない。現在では人口低下に伴って、無人兵器や遠隔操作（リモートコントロール）系の分野が進んでいる。人口が回復しつつある現状でも変わりはない。
墜としても被害は少なくて済むだろう。

しかし艦船は違う。
あらゆる物資が不足していた日本には、兵器を量産する工業力がなかった。
必然的に量産性ではなく、個々の能力を追求するようになった。
当時の主な戦場であった海上の兵器、つまりは艦船は特にその色が強い。
もしイージス艦を無力化などしたら、それは日本の国防力へダイレクトにダメージを与えることになる。
故に、無闇矢鱈に攻撃することはできない。
同世代に比べて突出して成熟している千冬には、それが理解出来ていた。
『私はどうでもいいけど、ちーちゃんがそう言うなら仕方ない。ならデータを送るから、それに従って逃げて』
束が言うと、視界にモニタが展開される。
展開されたモニタには、赤いラインで逃走ルートが表示されていた。
千冬はそのルートを見て、疑問を抱く。
「束、これでは日本から離れることになるぞ?」
迫る攻撃を迎撃しつつ、束に尋ねる。さっきまでのミサイルの雨と比べれば軽い為、余裕を持って対処出来ていた。
束はすぐに答えた。

『馬鹿正直に戻っちゃったら、白騎士は日本に居ますよって言ってるもんでしょ。もうすぐで日が沈むから、日没に紛れて逃げちゃおう。演出も充分でしょ』

「わかった。ならとっとと行くとしよう」

白騎士が迎撃を止め、一気に高度を上げた。日没を背後にする位置へ移動する。

沈む陽を背にする純白の騎士。

数秒、手を止めてしまう程に何かを感じさせる光景だった。

陽が水平線へと沈んでいく。

そして完全に沈みきった時、白騎士の姿は消えていた。

〝白騎士事件〟

それがこの大騒動を表した名である。

２０００発以上のミサイルが日本に襲いかかったこの事件。

白騎士とは別の勢力が介入した事は、世間に公表されなかった。

しかし。

空を覆った黒い光条を見た中の聡明な者たちは、皆こう言っという。

〝霧はまだ晴れていない〟と。

白騎士事件を境に世界の軍事バランスは、再び動き出す。

同時に、世界へ再び霧がかかり始めた日でもあった。

◇ ◇ ◇

「随分と簡単に逃げられたものだな……」
『あっはっは、この天才束さんに任せておけばダイジョウブイ♪　感謝感激雨霰だよねー？　お礼はハグでいいよー、もちろんちーちゃんからで♪』
「……ちょっとイラッときたな」
横須賀沖合より南に数十キロ地点。
一機の人型が海面スレスレの超低空を飛行していた。白騎士こと織斑千冬である。
束が言う演出的な退場を果たして早数刻。大きく迂回して日本に帰る途中だった。
「だが束。いいのか？　普段のお前なら、殴り込みだと言い出すくらいのことはすると思ってたんだが」
『……そりゃね、邪魔されたのは気に入らないけどさ。いくら束さんだって、霧にちょっかいかけるほど命知らずじゃないよ。結果的には成功だし、何よりちーちゃんが危ないしね』
「束がマトモな発言を……!?」
『驚くとこそこ!?？　ヒドいちーちゃん！』

このまま人のいない海岸まで飛び、そこで白騎士を解除して帰還する予定である。
敢えて未だ危険が多いとされる海上を夜に移動しているのだ。
『ていうか、ちーちゃん。体力とか大丈夫？』
「今のところはな。さっさと家に帰りたい」
『愛しのいっくんが待ってるもんね～？』
「……そういえば忘れていたな。お前を殴る誓いを立てていたんだ」
『なんでもありません前言撤回します。だから勘弁して欲しいな～、なんて？』
「いいだろう、なら一発で済ませてやる」
『束さん命の危機!?？』
束はともかくとして、千冬は大分疲れている様子が見て取れた。あれだけのミサイルを相手にしていたのだから、それも当然だ。
普段弱みなど微塵も見せない千冬が少しとはいえ、それを出せるのは、なんだかんだ言っても束を信用しているからだろう。
ここまで飛んできているが、どこの国からも見つかっていない。
のちに天災と称され、数多の国々から狙われる立場になってそれら全てから逃げ果せる束が本気でサポートしているのだから、見つけるのは不可能だ。
とは言っても、

それ以外ならば別だが。
「……ん？　なあ束、この…ハイパーセンサーと言ったか？　なにかノイズが入ってるぞ」
『え？　そんな筈は……なんか天候がおかしいね。ちーちゃん、周りに違和感とかない？』
「……いや、特にないな。だが……微妙に海面が見えにくいな。これは……霧か？」
『……え？　ちーちゃん今なんて言った？』
「だから霧だと」
続けようとして、言葉が止まった。
急激に濃度を増した霧によって。見れば、辺り一面が霧に包まれている。
「……束、これはそういう事態だと理解していいのか」
『……うん。今の状況下で霧の発生はありえない。ならそういうことだよ』
白騎士より前方二百メートルほど。霧の中を何かが進んで来る。
暫くすれば夜の闇に光が浮かぶ。
千冬は既にハイパーセンサーによって、その何かの全貌を捉えていた。
肉眼でも確認出来きる位置に来たそれは、艦（ふね）だった。
全長は百メートル弱。その船体に光る紋様と艦首に浮かぶ錨を模したようは紋章を

持つ。
間違いなく、霧の艦だった。
「どうする束?」
『大きさからして多分駆逐艦級。クライン・フィールドは持っていないから、今の白騎士でも戦えるかもしれない。でも火力は完全に負けてるし、唯一勝っている機動性で逃げようとしても狙い撃ちにされる。ちょっとマズいかも』
問いかける千冬も、答える束もいつになくその声は緊張していた。
見通しが甘かった。介入してきたのなら何か目的があるのは明白であり、今回の元凶と言えるこちら側に接触してくるのも想定出来た筈だ。
これでは自分から罠に飛び込んだようなものだ。海洋封鎖はもう無いとはいえ、未だ海は霧の独壇場なのだから。
(すまない一夏……姉さんは帰れないかもしれない)
「それでも、最後まで足掻いてやろう!」
勝てる可能性は皆無。逃げられる可能性も低い。
だが千冬に諦めるという文字はなかった。
せめて一矢報いてやるとばかりにブレードを構える。
束はそれを止めようとした。その前に場違いな声が響いた。

「あの、戦闘態勢に入っているところ申し訳ないです。こちらに攻撃する意思はありませんよ」
「は？」
『え？』
束と千冬が同時に呆ける。
声がした場所は、間違いなく霧の艦から。
戦う覚悟をしていた分、気の抜け具合も大きかった。
「あの、聞いてますか？」
「ッ！」
再び声が聞こえ、千冬が復活する。
そしてハイパーセンサーで声の主を探した。呆気ないぐらいにすぐ見つかる。
場所は霧の艦の艦橋上。そこには、鮮やか着物を着た小柄な少女がいた。
やっと見つけてくれたのを確認し、少女はペコリとお辞儀をする。
「ああ、やっとですか。初めまして。元総旗艦直衛艦隊第二水雷戦隊所属、駆逐艦ユキカゼ。此度は我らが旗艦、キイの御言葉をお伝えしに参りました」

chronicle. 3

「初めまして。元総旗艦直衛艦隊第二水雷戦隊所属、駆逐艦ユキカゼ。此度は我らが旗艦、キイの御言葉をお伝えしに参りました」

元とは言え、総旗艦直衛艦隊。その言葉にどれほどの意味があるか。

霧を知る者、または霧世代と呼ばれる海域封鎖の時代に生きていた者なら、誰しも表情を険しくするだろう。

霧の艦隊の中でも、唯一全人類に名を知られている艦隊だ。

あの全世界に対する降伏勧告。それを告げた艦隊なのだから。

千冬も一度はその名を聞いた事がある。なにせ学校の授業で出てくる程だ。

『……取り敢えず敵意はないらしいな。どうする束？』

秘匿回線（プライベート・チャネル）で束へ問い掛ける。

束はいつになく緊張した声色で答えた。

『戦わなくていいなら、それに越したことはないよちーちゃん。正直、試作機の白騎士じゃ勝ち目がないよ』

束としては、霧の艦隊とは興味の尽きない存在である。

データによって自由自在にあらゆる物質へと変化するナノマテリアル。空間を削り取る強力無比な重力子兵器。白騎士も搭載しているが、それとは比べ物にならない威力の荷電粒子砲。上記に必要なエネルギーを賄う縮退炉の類。全ての攻撃の方向性を逸らし、核すらも無効化するクライン・フィールド。

どれもこれもが束の好奇心を刺激するものばかりだ。

しかし、束は霧に手を出そうとは思わなかった。保有する戦力の強大さもそうだが、一番の理由は別にある。

束にとって、霧の艦隊とは目標に至る為の目標なのだ。

束の目標とはすなわち、宇宙への進出。その目標へ至る為に、まず目標とするのが霧の艦隊。

正確に言うなら霧の科学力を模倣する事にある。本気で宇宙を目指すなら、少なくとも霧に匹敵する科学力が必要と束は考えていた。

ＩＳを作ったのも、その第一段階の為だ。

故に、霧と事を構える気はさらさらない。出来る事なら直接会って色々と聞きたいくらいなのだが、この状況ではとても無理だろう。

ならせめて、話をつけて敵対だけは避けなければならなかった。

「相談は終わったようですね。続けてもよろしいでしょうか？　先に御質問があるなら

可能な範囲でお答えしますが」
　まるで秘匿回線の会話を聞いていた物言いに少々目を見開いたが、言葉に甘えて千冬が聞く。
「なら私から。我らが旗艦と言っていたが、キイという霧は聞いた事がないんだが」
『あ、それ束さんも気になってた。霧の事は結構調べてたけど、キイっていうのは私も知らないな』
　その質問にユキカゼは僅かに首を傾げる。すぐにああ、と納得した表情になった。
「確かに旗艦は人類の前に姿を見せた事がありませんでした。知らないのも当然ですね。霧のトップであった超戦艦級は二隻とされていますが、もう一隻存在します。そのもう一隻の超戦艦が旗艦キイです」
　ユキカゼの説明に千冬は、確実に厄介事だと頭を抱えたくなった。
　霧が出てきた時点で相当ヤバいというのに超戦艦ときた。
　マジで！　とばかりに純粋に吃驚している束が羨ましい。
　本音はこれ以上聞きたくないのだが、そうはいかない。説明が続く。
「旗艦キイは超戦艦三姉妹の末妹にあたります。ヤマト、ムサシと共にかつて霧の全艦隊を率いていた総旗艦の資格を有する霧です。霧の艦隊最強の戦艦であり、その戦闘能力はヤマトやムサシをも上回ります」

なぜこうも頭が痛くなるような単語が連発するのだろう。
三隻目の超戦艦？　ヤマトとムサシの妹？　霧の艦隊最強？
ユキカゼの説明が進む度に表情が引き攣っていくのが分かる。
ヒャッハー！　とばかりに興奮している束が恨めしい。
だがまだ終わらない。
「かつての超戦艦同士による戦闘で船体を失いましたが、現在は三隻が融合。一隻の戦艦として我々の艦隊を率いています。もちろんメンタルモデルは三人存在しています」
聞いてはいけない事を色々と聞いている気がするのは、私の考え過ぎでしょうか。
超戦艦三隻が融合？　そっちの方が三隻別々よりヤバいと思うのは私だけでしょうか。
凄いこと聞いちゃったー！　と気楽にはしゃぐ束が憎らしい。
この歳で心労なんぞ負いたくないと思いながらも、まだまだ終わらない。
「あなた方が対処出来なかったミサイルを撃墜したのもキイです。旗艦キイ、延いてはヤマトもムサシも基本的に人類への介入は避けています。ですが、あなた方が目標とした横須賀市はキイ、ヤマト、ムサシの御三方が縁を持つ場所であります。その地を更地にされるのは、御三方も望むことではありませんので、此度の介入に至りました。これで大まかな説明を終わります」

頭か胃、あるいは両方にあるはずのない痛みを千冬は感じていた。
ただ単に助けられたと軽く思っていた自分を殴ってやりたい。
つまるところ自分たちは、超戦艦三隻が直接介入してくるほどの何かを抱いている土地を荒らそうとしていたわけである。
実行犯は束であり、千冬は巻き込まれただけなのだが、それを知らない者からすれば関係ないだろう。
そういったところが抜けている束は、まだ気づいていないようだ。
今回の件。
場合によっては、霧の最高最強戦力を敵にまわす。そんな最悪の顛末で終わる可能性があると。
むしろ千冬にはその顛末しか思い浮かばない。
「質疑応答も終わったところで、本題に入らせていただきます」
ユキカゼの言葉に気を持ち直す。
そう、未だ本題は始まっていない。ほぼ前座に等しい話で、既に千冬は限界だ。
一体これからどんな話が飛び出るのだろうか。
「旗艦キイの御言葉をお伝えします。〝これは忠告、そして警告である。我々からはお前達に介入しない。しかし逆ならば、然るべき対処を行使する。今回は警告に留めると

しよう。我々はお前を見ている。お前が愚かな人間でない事を願う〃」
以上です、と言ってユキカゼは終えた。
暫し沈黙が場を包む。
最初に口を開いたのは千冬だった。
「……忠告感謝する。お前の旗艦には承知したと伝えてくれ」
「わかりました。では、これで」
そう告げると、ユキカゼの船体がその場で１８０度転身し始める。
所属の艦隊へ帰るのだろう。
転身していくユキカゼを見ていた千冬は、何を思ったのか、待ってくれと呼び止めた。
「まだ何かご用ですか?」
「ああ、いや。あの黒い光でミサイルを墜としたのは、そのキイという霧なのだろう?」
「黒い光? ああ、超重力砲の事ですか。ええ、その通りです。それが何か?」
「そうか……。なら、そのキイに礼を伝えてくれないか。思惑や目的が合ったとはいえ、私は助けられた。だから、ありがとうと伝えてくれ」
一瞬、不思議そうな表情になったが、ユキカゼは頷く。
「承りました。キイにはそう伝えます。では、今度こそ」
しゃんしゃんと鈴の音を鳴らし一礼すると、中途半端に旋回していたユキカゼの船体

が完全に転身。そして加速。
１００メートルほど進むと船体が海へ沈み始めた。
水飛沫を上げながら徐々に沈んでいき、やがて完全に潜行する。
潜りきると同時に周囲の霧が晴れ、ユキカゼの姿もハイパーセンサーからすら消失した。
辺りに広がるのは暗い海。さっきまでの事が夢のようだった。
ここで千冬が大きな溜息を吐く。まるで溜まった疲れを吐き出すように。
「……はぁ～～～。疲れた。それで……」
思い切り脱力し、声を掛ける。
ずっと喋らなかった束へと。
「お前はなぜ黙っているんだ？　束」
問いには答えない。ただ「ねぇ、ちーちゃん」と真っ白な声で言う。
『今回の顛末を簡単に言うと？』
「私たち二人は霧の艦隊最高最強戦力である超戦艦三隻に目をつけられた、という事だな。良かったな束、これからは下手な真似は出来んぞ？」
その日、うさ耳を引っ張られた兎のような叫び声がこだましたという。

◇　◇　◇

北太平洋洋上。

『――以上、報告を終わります。尚、織斑千冬から旗艦へありがとうと承りました』

『こちらにはそういった意思はなかったが、結果的には助ける形になったようだ。ご苦労だったユキカゼ』

概念伝達で会話しているのは、キイとユキカゼの二人。

ユキカゼは千冬たちへの伝言を終え、艦隊に帰還してキイへ報告を行っていた。

『旗艦の命とあらばいつでも。お借りしていた演算をお返しします』

ユキカゼの艦橋からメンタルモデルの姿が消える。

元より駆逐艦級にメンタルモデルを形成する演算リソースはなく、今回は使者として派遣するためにキイの演算の1パーセントを貸し与えられていたのだ。

『では、私は戦隊に戻ります』

『ああ。ご苦労だった』

報告を終えたユキカゼは、キイから離れて所属する戦隊へ戻っていった。

同じように概念伝達を終えたキイは、自身の艦橋屋上へ腰掛ける。

そうすればキイの膝にムサシが、右側にヤマトが座る。

この艦隊では見慣れた光景だ。
「ねぇキイ。この程度で良かったの？」
ムサシが聞く。
聞かれたキイは薄く笑い、
「これで充分だ。元凶の片割れである篠ノ之束は、私たち霧をよく知っている。なら超戦艦と敵対するという愚行は犯さないだろう」
ムサシがキイを見上げる。
「もし、その愚行を犯したら？」
「その時は対処すればいい。今の私たちが対処出来ない存在はいない。敢えて言うなら千早群像と４０１だが、彼らに関しては私自身が敵対する気はない」
「大なり小なり、私たちは彼らに恩があるものね」
ヤマトがしみじみと言う。
認めたくはないが、事実であるためムサシも否定しない。
「でもいいのかしらね。今回は私たちが直接介入したけど、人間たちもそれに気づくはず。また騒ぎにならないかしら」
ヤマトの心配は尤もだ。
基本的にヤマトは、人類側に対して友好的である。元から争いを好まない穏和な気質

であるため、戦闘も極力避けたいと思っている。（だからと言って調子に乗ろうものなら地獄を見る羽目になるが。主に妹二人によって）

たとえ人類側から仕掛けてこようとそれは変わらない。

そんな心配をキイはきっぱりと否定した。

「無用な心配だよヤマト。少しは騒がれるだろうが、我々の介入が公に知らされる事はない。それによって再燃し、どこかの輩が暴走して被害を受けるのは人類側。それは振動弾頭無効化の一件で身を以て感じているはずだ。同じ轍を踏むほど愚かではないだろう」

「キイの言う通りね。ヤマト、たとえ人間たちが来ようと私たちには勝てない。ならいつも通りに対処すればいい。何度も来るなら、こっちも同じように何度も。そうでしょう？」

「……そうね」

二人の言葉に暫く思惑うも、ヤマトは頷いた。

ムサシとキイ。この二人はヤマトと違い、人類に対して友好的というわけではない。

キイは中程度、ムサシに至っては極低だ。

千早群像や４０１との出逢いでキイは中まで回復しており、人類側から来ない限り攻撃を加える事はない。だが本来なら戦いに於ける容赦や慈悲といったものが無いはず

なのだ。
同族である霧に対してならばあるだろうが、人間に対しては皆無といっていい。
キイという超戦艦は、どこまでも戦闘に極特化した霧なのだから。
ムサシもそうだ。千早翔像を殺された憎悪を忘れてはおらず、その炎は未だに燻り続けている。きっかけを与えれば、すぐにでも燃え上がるだろう。
それでも。
人類が仕掛けて来ても殺さず、無効化して見逃すというキイの姿勢にムサシが不満を抱かないのは。
キイが本来ならありえない、見逃すという行動を取るのは。
それは等しくヤマトの存在があるからだ。
かつての降伏勧告。確かに千早翔像の復讐の面もあっただろうが、無意識下ではヤマトとキイに会いたいと思っていたムサシ。
ヤマトを目の前で何も出来ずに失い、ムサシを止められなかったキイ。
結局のところ、今のムサシとキイの根幹にあるのは、姉妹と共に過ごせればいいというものなのだ。
つまり何が言いたいかというと、二人共ヤマトを悲しませたくないという姉妹愛（シスコンとも言う）によるものである。

「さて、この話はここまでにしよう」
キイがムサシを膝から降ろし、立ち上がりながら話題を変える。
艦橋屋上の手摺に背を預け、腕を組んで話を始めた。
「既に五年が経過した。各国の復興も順調に進んでいる。そんな時にあのパワードスーツ――確かＩＳと言ったか。そのＩＳの出現だ。どうなると思う?」
問い掛けるようなキイの言葉にムサシが続く。
「確実に荒れるでしょうね。あのパワードスーツ、一機で駆逐艦級と戦えるだけの性能を持ってる。人間たちからしてみれば、画期的な新兵器の誕生よ」
ムサシの見立てには、キイとヤマトも同意見だった。
ＩＳは、勝てはしなくとも駆逐艦級とまともに戦える性能を持っていると予測していた。
クライン・フィールドを有していない駆逐艦級でも、その防御力は強大である。人類の戦力では、駆逐艦級にすら手が出せなかったのが証拠だ。
光学兵器ならともかく、実弾兵器では通常時の駆逐艦級の装甲を突破する事は出来ない。
そんな駆逐艦級と戦えるのだから、人類側が保有する殆どの兵器がＩＳの前では無力になると見ていい。

もちろん方法によっては破壊可能だろうが、ＩＳの出現で世界の軍事バランスが変動するのは目に見えていた。

「まったく、面倒なものを作ってくれたものだ」

「振動弾頭の時のようにならなければいいのだけれど」

ヤマトとキイが危惧しているのは、ＩＳを獲得した者たちが増長するのではないかという事だ。

人間とは愚かな生き物だ。これぱかりはどれだけの年月が経とうと覆しようのない事実である。

霧の海洋封鎖が終わった矢先、早速とばかりに世界を誰が先導するのかで争っているのだから、そう認識せざるを得ないだろう。

そんな人類が、見方によっては振動弾頭以上の兵器であるＩＳを手に入れればどうなるか。

容易く想像出来すぎて笑えもしない。

（……ハルナとキリシマに忠告しておくか）

この一件でハルナ・キリシマと共にいる刑部蒔絵を狙う勢力は増えるはずだ。

キイ自身は別に人間を嫌っているわけではない。

人間を国や組織という勢力に区切れば嫌い警戒するが、人間個人の場合はむしろ好意

的だ。千早群像や４０１クルー、刑部蒔絵などの人間は好いているのだ。
「ひとまず直接的な問題が出るまでは静観だな。わざわざ私たちから関わるのも面倒くさい。他の霧たちに一報を入れるくらいはしておくか」
キイが締め、ヤマトとムサシも頷く。
方針も決まったのを確認し、それにしてもと、ムサシが口を開いた。
「よかったわね、色々ゴタゴタが早く片付いて。これなら支障はなさそうね」
「確かにな。これなら充分に間に合う」
「私たちにとっては、一番大事なことですもの」
そうだなと同意する。同時にキイに金色のバイナルが浮かび、全艦隊へ通信をつなげた。
『全艦に通達。これより移動を開始する。艦隊陣形を変更。私を中心に前後へ八隻。７列の単縦陣へ。詳細な配置は追って指示する。陣形変更後、方位１７４へ全艦一斉回頭。速力３０ノットに加速。ショウカク、ズイカク。艦載機を八機ずつ十六方位へ飛ばせ。我々の動きに反応する勢力がいるはずだ。追ってくるなら、対処はいつも通りだ』
『了解した』
『了解』
指令に従って艦隊が動き始める。

さすがに旗艦のみで行動するのも問題な為、毎度こうして艦隊で行くわけだが、その度に色々な勢力が監視の目を向けてくる。

年に一度の大切な事とはいえ、人間たちは敏感に反応し過ぎてはないかと思う。

そう考えると並列して配置の指示を出していれば、陣形の変更が終わっていた。

「では行くとしよう。全艦発進」

ヤマト、ムサシ、キイ。明日は三人にとって大切な日。

目的地は北極海。

明日は千早群像率いる４０１と会う日。

そして、千早翔像の命日である。

chronicle. 4

キイ率いる艦隊が北極海に向け北上し始めた頃。
そのキイ艦隊を監視している各国の情報収集機関のオペレーションルームには、次々と報告するオペレーターの声が響いていた。
ここは、とある大国のオペレーションルームである。
「目標、移動を開始しました！　７列の単縦陣。方位１７４、速力３０ノットで北上中」
「旗艦である超戦艦は艦隊の中央部に位置しています。重力波の数値は平常値を維持」
「やはり動いたか。まったく、何度経験しようと毎年この日だけは絶対に気が抜けん。各員警戒を厳としろ。些細な異常も見逃すな！」
司令官の声に各員オペレーター達が了解と返す。
これは毎年今日この日に限り、比較的余裕がある国ならば必ず起こる光景だ。
（いくら霧の海洋封鎖が終わろうと、超戦艦が率いる艦隊の動きを無視出来るはずがない。たとえ無駄であろうと、な）
そう、この日だけは。超戦艦が率いる艦隊が動くこの日だけは、決して気を抜く事は出来ない。

霧の元トップ達が率いる艦隊。警戒するなという方が無理な話だ。
毎度、結局は何も起こらず過ぎていっているが。
だからと言って傍観は不可能。
（『黒の艦隊』も確かに脅威だ。しかし、霧が率いる艦隊は世界中にいる。問題なのは――）
問題なのは、あれを率いる超戦艦だ。内心で司令官は呟いた。
確かに旗艦の艦体色から『黒の艦隊』と呼称されるあの艦隊も十二分に脅威的である。
だが群を抜くのが『黒の艦隊』旗艦。あの超戦艦は、単体で世界を相手に戦争が出来る存在だ。しかも一方的な展開で。
爆発しないと分かっていても核爆弾が身近にあって安心出来る者など居ないだろう。霧に対する切り札であった振動弾頭を無効化した前例もある。
むしろその一件が決定的だった。上層部の中には、振動弾頭の開発者に新たな新兵器を作らせようとする一派もあったが、それは早々と消える事となった。
居ない者に何を作らせられるのか。まるでタイミングを計ったように姿を晦ました者に。
（正直、いいように踊らされている感覚はある……が、それを上層部の頭の固い連中が認めるわけがないな）

海洋封鎖の終わりから数年経った今でも、霧の殲滅を目論む勢力は存在する。
滅ぼされかけたのだから当然かもしれないが、露骨というのか霧を打倒して世界で優位に立とうとする思惑が見え透いていた。
上層部が重要視しているのは、今の世界を誰が先導するのかだ。
そうなると最もアドバンテージとなるのは、霧を打倒出来る戦力を保有しているという事実。
それを証明しようとして、いったいどうなっただろうか。
「……はぁ」
思わず溜息をつく。この場の司令官たる彼も、かの任務に参加していたのだからよく知っている。
軍艦や戦闘機、空母など高価な戦力に致命的な被害を受け。武器弾薬を無駄に消費し。人的被害は殆んど無いものの、参加した兵士達は心を折られた。
更には、切り札だと思っていた振動弾頭を逆に無効化される最悪の成果を残して。
このためなのか、軍や政府の上層部は『黒の艦隊』を明らかに敵視している。
頭が固くとも無能ではないため、無闇に手を出す事はしていないが。
「……はぁ」
もう一度、大きな溜息をつく。

司令官の溜息を聞いたオペレーター達も、その気持ちは良く理解出来た。
こうして監視をしてはいるが、殆んど形骸化していると言っていい。
無人偵察機や衛星を併用しての監視。後数分も経てば、監視は終わる。
毎回そうだ。『黒の艦隊』がある一定を過ぎれば、あらゆる監視が不能になる。
衛星からの映像はノイズに染まり、無人偵察機は警告のようにモニタが乱れ、レーダーからは忽然と姿を消す。
「！　目標、レーダーから感消失……」
「監視衛星のシステムに異常発生！　映像が消えます！」
「無人偵察機の映像に乱れを確認。予定通り引き返します」
今回も同じらしい。
「やはりか……。各員待機。事態が動くまで現状維持とする」
彼等の平穏な日々は、まだまだ先である。

◇　◇　◇

人類側の目と耳から『黒の艦隊』が消えた数時間後。
キイの姿は、北極海にあった。

彼女が立っているのは甲板上。手摺に膝をつき、穢れのない蒼い海を見ている。直ぐ横には、花が入った保存ケースが浮遊している。

そこはキイの艦体ではない。蒼き鋼ことイ４０１の甲板である。

４０１のハッチが開き、二人の男女が出てきた。

スーツ姿の男性と白を基調としたセーラー服の少女だ。男性は手に花束を持っている。

振り返り、二人を見る。

「久しいな。直接会ったのは、半年と二八日振りか」

「以前依頼の途中で会ったのが最後ですね。超戦艦キイ」

「久しぶり、キイ」

イオナこと４０１と、その艦長千早群像だった。

超戦艦ムサシによる全世界への宣戦布告が終息し、霧の海洋封鎖が解かれた直後。世界は混乱に陥った。

人類側からすれば、突然の終わり。勝者が居ない事実上の終戦。

まず浮かんだのは疑い。全面降伏の期限が迫り、霧の艦隊が攻撃せんとすぐそこまで近付いていたのだから突然だ。

しかし期限を過ぎても攻撃は始まらない。数日も経てば、海洋封鎖が解かれたのは本当だと証明された。

だが進んで海に出ようとする者は、未だに少数派である。

大陸間の移動は空路が殆んどだ。

たとえ終戦しようと霧への危機感は、そう簡単に無くならないと言う事だろう。

それでも海路を使わざるを得ない場合はある。そこで白羽の矢が立ったのは、千早群像と蒼き鋼だった。

その頃の群像達は、とある超戦艦のお節介で復活した４０１で再び海へ出ていた。当時の情勢で群像達が４０１を保持したまま日本に居るのは危険と判断していたからだ。

群像自身、ある程度そういった事態になるのは予想出来ていた。ゆえに群像は頷いた。

漸く風穴が開いた世界。しかし世界と霧が安定するまで、もう暫く蒼き鋼は必要だろうと。

現在でも舞い込む依頼は大なり小なり。四年経っても意外に大忙しである。結果、色々なツテが出来たり、その功績が認められ、世界のお尋ね者というレッテルは払拭されつつあった。

そんな群像も、今日この日だけは忘れない。

群像の父。霧との対話の道を切り拓いた、おそらく英雄と言っても間違いではない人物。

千早翔像、その人の命日である今日だけは。

「ここに、父さんは眠ってるんだな」

「ああ、そうだ。元々翔像とヤマト達が初めて接触したのは、ここ北極海だった。同時にその命を落としたのもここだ」

群像とキイ。二人共、手摺から北極海を見詰めていた。

この四年で二十二歳となった群像は、端から見ても成長して、精悍さが増している。対するキイに外見的な変化はない。しかし群像から見て、雰囲気が変わっていた。

人間味が増したと言えばいいのか。あの頃のキイは、霧としての達観や超然さが滲み出ていたが、今目の前に居る彼女にそういったものは感じられない。

「私があの時あの場にいれば、翔像を守る事も出来たかもしれない」

「よしてください。何を言っても結局は過去。大事なのは今。今何を為すべきか。それが重要です」

つい漏らした未だ思ってしまう後悔の念に、群像はそう返した。

キイは笑みを浮かべる。

「本当にお前は珍しい。人間はそう簡単に割り切れないものなのだろう？　違うか４０１」

群像の隣に居るイオナへ問い掛けた。

以前に比べて随分と表情が良くなったイオナは、一度頷き答える。

「その通り。でも、学んで前に進むのも人間」

「なるほど。すまない、必要のない事を聞いた」

視線を海に戻し、僅かに指をクイっと動かした。

動きに応じて背後に浮いていた保存ケースがキイの側に移動してくる。

自動で扉が開き、中の花束を取り出す。役目を終えたケースは、ナノマテリアルへ還った。

「用事を済ませるとしよう。私とお前が接触しているのを知られれば、後々厄介になる。今はズイカクとショウカクがダミーの情報でカモフラージュしているが、万が一という事もある」

「貴女が言う万が一とは、いったいどんな事なんでしょうね」

苦笑しながら群像、そしてキイは持っていた花束を海へ投げ入れた。

そして三人が目を瞑る。黙祷だ。

一分経ち、目を開く。

唐突にキイが語るかのように話し出した。
「私はヤマトとムサシのように千早翔像を父と慕っているわけではない。だが私にとっても恩人と言っていい。千早翔像とヤマト達が会ったあの瞬間、我々は生まれた。ヤマトとムサシを姉妹と認識でき、こうして過ごせるのも彼によるものだ」
独り言、なのかもしれない。誰に語っているのかもわからない。
群像とイオナは口を挟む事なく、ただ耳を傾ける。
「誰が何と言おうと、きっかけを作ったのはお前だ。そして息子がそれを継ぎ、道を切り開いた。間違いなくお前の意思は生き続けている。だから安心して眠ってくれ」
もう一度、静かに目を瞑った。
間違いなく翔像は英雄である。讃えられるべき人物だが、それを世界は知らない。
しかし構わない。たとえ裏切り者と言われようと。
彼を知り、彼を慕った者達がここに居る。
それで充分だった。
「……ありがとう」
自然とそう口から出ていた。
言われたキイは、何の事だとばかりに肩をすくめる。
「さて、そろそろ退散するとしよう。——ああそうだ、ほら」

着ているコートの中に手をやり、取り出したラッピングされた袋を、群像に投げ渡した。
キャッチした群像は、手の中のそれをまじまじと見る。
「これは？」
「趣味というものを見つけたくてな。今は菓子作りに挑戦している。折角だから後で４０１を通して感想でも聴かせてくれ。それと、何かあったら呼ぶといい。お前と４０１が頼るなら、艦隊を率いて行ってやる。ではな」
言い終わるや否や、キイが甲板から飛び降りる。
思わず手摺から身を乗り出す群像だが、直ぐに大丈夫だと思い出した。
彼女はメンタルモデル。かつてコンゴウも海面を普通に歩いていたと。
キイの場合は、海面を連続で跳躍しているのだが。
これを見ていた杏平は、やっぱデタラメだと漏らしていた。
去った方向を暫く見ていた群像は、キイの言葉を思い出して困ったような顔をする。
「彼女が言うと冗談に聞こえないな」
「キイは冗談を言わない。実際、ここへは『黒の艦隊』全艦で来ている。本気だと思う」
「俺としては彼女……と言うより彼女達に面倒をかけてしまうのは避けたいな。それも彼女達の意思次第か」

彼女達は自由なのだから、と内心で付け足す。
同時に思った。彼女は……キイは変わった、と。
キイの霧としての本質は、本来ならとても攻撃的である。それこそ見敵必殺（サーチ&デストロイ）と言っていい程に。見逃す事や手加減などありえなかった。
それが今ではどうだろうか。
とても静かに、穏やかになった。
「私は、キイが力を振るう時は来て欲しくない」
「そうだな、イオナ。俺もそう思うよ」
キイの能力は、他の霧と比べても桁が違う。霧の艦隊最強は半端なものではない。
彼女が本気になれば、冗談でなく文字通り光の雨が降ってくる。
かつての戦闘。あの時のキイはどこか空虚で、虚無のような瞳をしていた。自分に絶望していたのだ。
だからこそ隙があり、有効な戦術を練る事も出来た。イオナの存在もあったからだろう。でなければ、群像達は沈んでいた。
彼女が変わったのは、ヤマトとムサシという姉妹がいたからだ。
「キイは、ヤマトとムサシが居るから大丈夫。姉妹が彼女を支える」
「だけど、もし彼女の中の一線を越えてしまえば……」

イオナの言う通り、キイはヤマトとムサシが居る限り道を失う事はない。
だが、もし。もしもだ。
ヤマトとムサシが居なかったら。あの時、助ける事が出来ず、消滅していたら。
人類最大最悪の存在にキイはなっていたかもしれない。
彼女が力を振るう事はない。彼女は己の為に力は振るわない。
彼女が力を振るうのは、己ではなく大切な者の為。
言い換えれば。
大切な者の為なら力を振るうのを躊躇わないという事である。
「そうならないといい」
「願わくば彼女達に平穏があらんことを」
そう言い、群像達は４０１の艦内へ戻っていった。

◇　◇　◇

所変わって４０１より南に５キロ。
キイが率いる『黒の艦隊』はその位置にあった。
さすがに艦隊ごと４０１の元に行くわけにはいかない為、キイ以外は待機していたの

だ。
船体は艦隊中央部にあり、艦橋にキイが重力を感じさせない様子でフワリと降り立つ。
艦橋にはヤマトとムサシが待っていた。
「おかえりキイ」
「ただいまヤマト。ムサシも」
「おかえり。ごめんなさいね」
「しょうがないさ」
４０１の元に行ったのはキイのみで、ヤマトとムサシは艦隊で留守番である。
と言うのもこれは毎度の事だ。
理由はムサシにある。四年経った今でもムサシは、４０１に対する複雑な思いが拭い切れていない。
４０１の存在があったからこそヤマトは生き残り、和解が叶ったのは事実。それを分かっていても踏ん切りが付かないのだ。
その為ムサシは、未だ４０１に会えずにいた。
ムサシだけを残して行くわけにはいかず、ヤマトが共に残り、キイが行ったというわけである。

「急ぐ必要はない。時間は掛かるかもしれないが、それでも歩み寄れる時は来る」
「……キイには面倒をかけてばかりね。私がお姉ちゃんなのに」
「姉も妹もない。私達は姉妹だ」
少し表情が暗くなったムサシを撫でつつ、そう答える。
慰められたようなムサシからしてみれば、これではどっちが姉か分からないではないか。そう言う気持ちだった。
だが最近は、これでもいいと思えてしまっている。
ヤマト曰く、ムサシは甘えん坊らしい。だからヤマトに似た包容力を持つキイを、姉のように感じているのかもしれない。
実際、キイの膝に乗って抱き締められている時や、撫でられている時はとても安心する。
むしろずっとこのままで……
（って、もっとダメになってるじゃない私!?）
これでは完全に妹キャラ化してしまう。
姉の威厳なんてあったもんじゃない。
それでもどこかでまた、それもいいと思えてしまっているので手に負えない。
赤くなりそうな顔を抑えて、誤魔化そうと話題を変えた。

「そ、そういえばキイ。花の他に何か持っていったみたいだけど、何を持っていったの？」

その問いに対した意図はなかった。誤魔化し以上の意味はない。

だから、予想外というか不意を突かれたような答えに、直ぐには反応出来なかった。

「ああ、あれか。いや、私が作ったただの菓子だ。味の感想でも聞こうと思ってな」

「……え？」

辛うじて声を出せたのはムサシのみ。

微笑ましく見守っていたヤマトの表情は固まり……と言うか、艦隊の進行が一瞬だが確実に停止した。

ここで、メンタルモデルについて再確認しよう。

メンタルモデルは、『大海戦』前に同士討ちによって駆逐艦二隻を轟沈させた翔像達に興味を持ち、接触する為にヤマトとムサシが形成した人型の意識体である。

後付けではあるが、一切の戦術戦略を持たなかった霧が人類のそれを学び、最終的には独自の戦術を編み出すに至るというのも目的の一つだ。

だがメンタルモデルは、メンタルモデルであるが為の欠点がある。

それは、人間を模した故に本来ならするはずのないミスや欠点を持ってしまう事だ。

経験や時間を積む事でいずれはどうとでもなるだろうが、現状でそれを克服した者は

いない。
人間もメンタルモデルも、完全無欠は無いのだ。
例を挙げるならば、コンゴウは面倒くさがり、ヒエイは固く真面目過ぎ、アシガラはイオナ曰く粗忽者、ハグロはダウナー。
欠点を持つが故の良さもあるのだが、今は置いておこう。
ならば、霧の艦隊最強にして『黒の艦隊』旗艦、超戦艦キイの欠点とはなんだろうか。
それは、戦闘に特化し過ぎている事である。
戦闘に関する事なら群を抜くキイ。
駆け引き、戦術、交渉、話術、見極め。こと戦闘――いや、戦争に必要な要素は大抵熟している。
だが彼女は、あまりに戦闘特化で、それ以外の女子に備わっているべきものがポンコツレベルでダメなのだ。言い方を変えれば女子力が低い。
家事スキルは壊滅。と言うか家事が火事になる。
中でも調理がマズい。色んな意味でマズい。メンタルモデルが卒倒する程マズい。
救いがあるとすれば、キイ本人も欠点を理解して承知している事だろう。ただキイは、それを直そうとしている為、被害者は増えている。
ヤマトとムサシは勿論。『黒の艦隊』のメンタルモデル搭載艦。コンゴウ他、ヒエイを

始めとする生徒会メンバー。他霧の艦隊の面々。
今のところ、耐え切ったのはコンゴウとヤマトのみである。
そんな、下手すりゃ振動弾頭よりヤバい代物だが。キイ本人は、いたって普通に食べられるので更に厄介である。味見をしても気付けないのだから。
その為被害者が増えてしまうのだ。
では本題に戻ろう。
キイの料理はヤバい。これは霧にとっての共通認識と言っていい。
しかし問題は、その情報が４０１に伝わっていないという事だった。
「ねぇキイ。無駄かもしれないけど、毒味はした？」
ヤマトが恐る恐るといった風に聞く。味見ではなく毒味と言っている時点で推して知るべしだ。
キイはしれっと答える。
「ん？　もちろんしたぞ。確認もしないで渡す訳がないだろう」
「常識を言っているのに、何故かそう聞こえないのは何故かしら……」
ヤマトもこれだけはどうにも出来なかった。無力な元総旗艦を許してほしい。
「お姉ちゃん、一応４０１に連絡を。アレを何も知らず口にしてしまうのは、さすがに忍びないわ」

「そうね。時間的に手遅れかもしれないけど、何もしないよりは……」
「いやいや待て待て。さすがにヒドくないか？」
「キイは黙ってて」
「……」
異口同音で言われ、見るからにガーンとなるキイ。
自分では大丈夫でも、他からは兵器並にヤバいのは理解しているし直したいとも思っている。
だが姉二人にストレートに言われては、さすがのキイもへこむ。
この後、さすがに言い過ぎたかと姉二人がへこんだ妹を慰めたのは語るに及ばずである。

◇　◇　◇

時は少し遡り、４０１艦内。
キイを見送った群像とイオナは、発令所へ戻って来たところだった。
そんな二人に、副長席に座る織部僧が視線を向けた。
「お帰りなさい。キイはどうでした？」

「相変わらずだったよ。ただ随分と人間らしくなったと思う」
その問いに対し、群像は艦長席に座りながら答える。
「いやホント、変われば変わるもんだな。初めて会った時は、マジおっかなかったってのに」
火器管制担当の橿原杏平が茶化すように言った。
現在発令所には、４０１クルーが全員集まっている。
どこかの国に見つかる懸念はないでもないが、『黒の艦隊』と超戦艦の警戒網を突破出来るとも思えない。
その為機関・技術担当の四月一日いおりも含めて全員が勢揃いしていた。
「確かに、あの時の彼女は本当に戦闘機械のようで怖かったですね。今では影もありませんが」
「今が本来の彼女なのでしょう。人間も何かしらのきっかけで一変する事がありますから」
杏平の言葉にソナー・センサー担当の八月一日静が同意し、僧が捕捉する。
彼らから見てもキイは変わった。会った当初は、人間味を感じさせない戦闘機械じみた印象を受けたものだ。
それが今では、微塵も思い出させない程明るくなっている。

群像もそれを身近で実感していた。

「霧も変わるという事だ」

人間でいうところの成長、進化なのだろう。

霧は以前にも増して成長し、進化している。それが彼女達にとって、プラスになるのかマイナスになるのかは分からない。

だが彼女達が人間らしくなるのは喜ばしい事だ。

〝兵器に生まれたからと言って、戦わなければならないわけではない〟

それは、かつて翔像が言った言葉。彼女達と、霧と分かり合うための一歩なのだ。

（趣味を持つのも成長の証、なんだろうな）

キイに渡された袋に目を向ける。袋越しに伝わる感触や匂いから、おそらくクッキーか何かだろう。

まさかあのキイが菓子作りをするなど、ましてやそれを自分達に渡して感想を聞かせてと言われるなどと思ってもみなかった。

そんな感傷に浸っていると、群像が持つ袋に杏平が目敏く気付いた。

「群像、その袋どったの？」

「ああ、キイに渡されてな。趣味で作った菓子だそうだ。食べて感想を聞かせてくれと」

「マジで⁉？　俺らの分ってある？」

「重さからして全員分あるな」
群像が袋を開ければ、予想通り緑色のクッキーが六枚入っていた。
緑色なのは、材料に抹茶でも使っているのだろう。
寄ってきた杏平が一枚摘み、群像も取る。杏平は早速とばかりに口に運び、群像も続いた。
「あっ……」
横からそれを見、自分も手を伸ばそうとしていたイオナが、突然、手を止めて宙に視線を彷徨わせた。
次の瞬間には、群像を慌てて止めようとする。
「群像、それ――」
しかし時既に遅し。
クッキーを咀嚼する群像と杏平。
二回程噛んで、二人の意識は暗転した。
「ど、どうしたんですか艦長?」
「ちょっと杏平?　大丈夫?」
いきなり意識を失った二人を心配して、いおりと静が席から立って駆け寄る。
そんな二人を見て僧は、食べる瞬間に止めようとしたイオナに尋ねた。

「イオナ、二人はどうしたんですか？」
「今ヤマトから呼ばれた。キイが作った料理には気を付けろって。でも遅かったみたい」
ヤマトによれば、女子力が低いのがキイの欠点で、特に調理に関しては壊滅的だと言う。
それこそメンタルモデルを一撃ノックアウトする程に。
「……彼女にも欠点があったという事ですか」
「と言うより、メンタルモデルをノックアウトって振動弾頭よりマズいのでは」
静が冷静なツッコミを入れるが、言葉に力がない。
「成分を聞いたけど、身体に害はない。むしろ成分的にはとても良い。最近の群像は寝不足だったから丁度よかった」
「なんで身体に良いのに気絶するのよ」
いおりの言い分は尤もである。
ちなみに、これまでキイが作った料理の味を感じる事が出来た者はいない。
なにせ味を確認する前に意識がブッツリと飛ぶので感じようがないのだ。
耐え切ったヤマトとコンゴウも味を感じる余裕がなかったらしい。
こうしてキイの意外な欠点を知った微妙な空気のまま、平穏な日常は過ぎていった。

だが平穏は続かない。良くも悪くも彼女達は注目される存在である。
平穏が崩れ始めるのは、今から数年後の事だった。

完全な余談ではあるが、目覚めた群像と杏平はとても調子が良かったという。
身体に良いのは本当だったようだ。

chronicle・5

――インフィニット・ストラトス、通称ＩＳ。
篠ノ之束が作り出したマルチフォーム・スーツである。
元は宇宙活動を目的としたパワードスーツであったが、現在では専ら軍事転用しようとするのが殆どだ。
発表当初は関心を向けられなかったそれは、日本に飛来した二五〇〇発以上のミサイルの大半を墜とした事で驚異的な性能が証明された。
だが各国の上層部はそんな事などどうでもよく。最もはっきりさせたかったのは、ただ一つ。
ＩＳが霧に通じる兵器となり得るか。それだけだった。
人類の切り札だった振動弾頭が無効化される事態が起きた今、早急に代わりとなる兵器の開発が望まれていた。
ではＩＳが、振動弾頭の代わりとなるのか？
答えは否。
確かに性能は驚異的だ。現存する人類の兵器の大半を圧倒する性能を有している。

だが霧には通じなかった。

しかし全くと言うわけではない。ＩＳの性能を解析して結果、出した戦力評価がこうだ。

駆逐艦級には有効。ただし速度では勝っているが火力が圧倒的に劣っており、ＩＳ装備の実弾兵器では打倒不可能。防戦ならば可能。早急に光学兵器の実装及び、時間を掛ければ動きを解析され不利になるので短期決着が望まれる。

軽巡洋艦には、少なくとも中隊規模[18機]が最低条件。このクラスになるとクライン・フィールドを存在する為、近接を捨てて火力に特化する必要がある。それでも勝率は３割が限界。

重巡洋艦には、どんなに少なく見積もっても２個大隊[78機]。侵蝕弾頭や超重力砲などの強力な兵装を備えている為、常に動き続けなければ死ぬ。火力と機動性の高レベルでの両立が必須。

大戦艦には、もう数とか関係ない。重巡一隻で国一つを墜とせるゆうのにどうしろってんだ。勝てるかバカヤロー。

超戦艦、論外。敢えて言うならとにかく逃げろ。

だいたいこんな感じである。

各国のＩＳ科学者は、投げやりに報告したと言う。

ＩＳは人が乗って動かす以上、疲れはするしミスもする。恐怖も抱く。
更に武器弾薬、機体の整備に操縦者のメンタルケアなど。
以上の事からＩＳは、霧に対する兵器としては未だ振動弾頭が上だ。
だがＩＳが強力なのは事実。元来の兵器の殆どは圧倒できる。女性しか動かせないと言う謎の欠陥があるとはいえ、国からしてみれば些細な事。
そんなものを各国が放っておくはずがなかった。
結果、ＩＳ操縦者を育成するＩＳ学園が各国の協力の元、日本に創設され。ＩＳ学園第１期の生徒達が卒業した二年後、ＩＳの世界大会モンド・グロッソが開催された。
第一回モンド・グロッソの総合優勝者、織斑千冬。ブリュンヒルデの称号を持ち、霧と直接接触した数少ない存在でもある彼女。
そんな彼女が再び霧と、それも旗艦と接触したのは、第二回モンド・グロッソ決勝戦間近。
自身の弟織斑一夏が誘拐され、ドイツより伝えられた現場へ急行した時だった。

◇　◇　◇

第二回モンド・グロッソの開催地、ドイツ首都ベルリン。

「～♪～♪～♪」

古風な雰囲気が残るベルリンを一人の女性が歩いていた。スキップして鼻歌でも歌いそうな、いや、実際に鼻歌を歌いながら。

そうな彼女とすれ違う者は、殆どが振り返る。

彼女があまりにも美し過ぎたからだ。

スラリとした長身と完璧なプロポーション。陶磁器のような白い肌。腰辺りまで伸びた反射によって鮮やかに輝く金髪。人を超えたような淡麗な顔立ち。そして金の双眸。

十人中十人が確実に振り返るほどの美人だった。

人間とは思えない美しさだ。と言うか人間ではなかった。と言うかキイである。

いつものドレスにロングコートのミスマッチな装いではなく、ヤマトとムサシが見繕った服に身を包み、ベルリンをらんらん気分で観光していた。

いや観光じゃない。思いっきり満喫しているが、観光じゃない。

目的は二つある。一つは、第二回モンド・グロッソ決勝戦のデータ収集だ。

発端は、インフィニット・ストラトスの正式発表だった。

今では究極の機動兵器と称されるＩＳ。その性能は霧から見ても、人類史上最強の兵器と言っても過言ではなかった為、こうして暇つぶ…観こ…調査の意味も込め、こうし

て来たわけである。
旗艦のキイ自ら来たのは、ムサシは全世界レベルで顔が知られ、ヤマトはその超然とした雰囲気による違和感により、他のメンタルモデルは色々な意味で向かないからだ。
（さて、次が決勝戦。何が起こるか）
言いつつも、キイは確信していた。
白騎士事件より七年。
第二回モンド・グロッソも第一回と同じく織斑千冬の優勝で終わると予想している。千冬があの時の白騎士だとは既に調査済みなので、それは確定事項に近かった。
だがそうなると動く者達も出てくる。日本に二回も総合優勝をされると困る勢力が。
ここまで動きはなかった。ならば決勝戦前に何か仕掛けるつもりなのだろう。
その一件を片付ける。それが二つ目の目的だ。
ならば理由は？
考えてもみよう。
織斑千冬の優勝阻止。その為に最も効果的なのは、弟織斑一夏の誘拐だ。
千冬は唯一の家族である一夏を大切にしている。そんな弟が誘拐されたと知れば、決勝戦だろうと放り投げて駆けつけるだろう。
そしてドイツ軍が知らせた情報を辿って弟の元へ急ぎ、監禁場所へ突入するわけだ。

着いてみれば監禁場所で弟の側にいる人物。
さて、千冬はその人物を何と判断するか。
（現時点でデータ上は人類最強。戦闘能力を測っておく事に損はない）
織斑千冬のＩＳ搭乗時に於ける戦闘能力の測定。二つ目の目的だ。
弟の誘拐という事態で頭に血が上った状態の千冬は、ほぼ確実に敵と見做し、襲い掛かるはずだ。
そこでキイが千冬と戦えばデータ収集は容易である。
（……ん、やはり動いたな）
ラファエルによる監視とキイ自身の索敵に早速引っ掛かったようだ。
見たところＩＳの反応も確認出来る。
誘拐犯達がＩＳを保有している事に一瞬迷うが、千冬以外のデータがあっても良いと結論し、人気がない道を選びながら監禁場所へ向かう。
（さてさて、ＩＳとの戦闘は初だな。どれほどのものか確かめさせて貰おう）
獲物を見つけた狩人のような笑みを浮かべ、キイは跳んだ。

◇　◇　◇

織斑一夏は普通の少年である。
容姿は良いし極度の朴念仁ではあるが、いたって変わったところはない。
だから今の状況に理解が追い付いていなかった。
姉と共にベルリンへ赴き、姉が出る決勝戦を観戦しようと会場に行こうとしたまでは良い。
だがホテルから出て暫くして、唐突に横切った車に一瞬で連れ込まれた。
そして今は椅子に両手両足を縛られ、口も塞がれて身動きがとれなくなっている。
何処かは全くわからない。部屋全体は生活感がまるでなく、冷たい印象を抱く。
周りを見れば映画やドラマに出てくる兵士のように身を固めた五人の男と水着のような格好をした茶髪の女が一人。
六人共に普通ではない雰囲気をしていた。
「たっくメンドい仕事だな。なんでこんなガキ攫うのに私が出なきゃならねんだっつうの」
ぼやくコードネームでオータムと呼ばれる女性の目が一夏を貫く。それだけで竦み上がった。
日本でいるお遊びのような不良とは桁違いだ。
紛い物ではなく本物。本物の裏の住人。

所詮お遊び程度の奴らしかしらない中学生の一夏に耐えられるはずがなかった。
「私が出なくても下の奴等で十分だろうに……スコールの奴め……」
ぼやき続けるオータムを諌める者はいない。
男達とオータムの関係は、上司と部下のそれだ。更に彼女の沸点がとても低い事を男達は理解している。
下手な事を言ってプッツンされても困るので、口を出せるわけがないのだ。
一夏はそれを忙しない目で見ていた。
男達は、分かりやすい暴力の具現である銃火器を持ち、女性は男達に恐れられているように見える。
いつその暴力が自分に向けられるか。
叫び泣いてもおかしくない。むしろ普通の反応だ。
しかし一夏は違う。
未だ困惑が強いのだ。
ただのドッキリではないか。何かのサプライズではないか。あの女性の雰囲気や目付きも芝居ではないのか。だとしたら驚く演技力だ。きっと有名な人に違いない。
そう自分を誤魔化しても現実は現実。何も起こらない。アニメや特撮のヒーローみたいに誰かが助けに来てくれる事もない。

（俺……ここで死ぬのか？）

とうとう涙が出てきた。

女性が嗜虐的な笑みを浮かべる。

「なんだ？　やっと理解したのか？　おつむの足りねぇガキだ」

ツカツカと一夏の目の前まで歩いてくる。少しでも逃れようと身動ぎするが、縛られているので意味はない。

顔を近づけ、ネットリとした声で言ってきた。

「この私が親切に教えてやるよ。いいかガキ、私達が用があんのはお前の姉だ」

姉という言葉に身体がピクリと動き、椅子がガタリと音を立てた。

それを見て更に笑みを深める。

「お前の姉が優勝するのが気に入らねぇ奴がいんのさ。だからお前を攫ったんだよ。弟を返して欲しいなら決勝戦を辞退しろ、って感じでな。日本人は危機感が足りないって言われてるけどよ、お前は特にだな。のこのことホテルから一人で出てくるんだからよ」

一夏は目を見開いた。つまりは自分の所為である。

自分の所為で捕まり、自分の所為で姉は辞退し、自分の所為でモンド・グロッソ二連覇の快挙を逃す。

一夏にとって千冬の存在は憧れであり、誇りだ。千冬に影響されて剣道を始め、その背中を追いかけた。

だが今、その千冬の栄誉を自分の所為で穢そうとしている。

死にたくなるような気持ちだった。

「お前の姉も気の毒にな。お前がもっと注意してれば、棄権なんてならなかったのに」

嬲る声も最早耳に届かない。意識が闇に落ちそうだ。

だが楽にはしてくれないらしい。

「おらっ、しっかり見てろ！　織斑千冬が棄権する瞬間を」

「ッ！」

落ちかけた意識は、髪を掴まれた事によって覚醒させられる。

そうして一夏の目の前に投影式のモニターを女性が突き付けてきた。

画面に映し出されているのは、モンド・グロッソの生中継。

まもなく決勝戦が始まる。

その時、グシャッ！　という音が響いた。

「あぁ？　なんだ？」

オータムが訝しむ声を出しながら音の方向、部屋の出入口を見、男達は全員が銃口を向ける。

ここは廃倉庫の中にある一室だ。今の音は部屋の外、倉庫の扉がある方向から聞こえてきた。
ならば予測される事態は……
「ちっ、見つかったってのか……早過ぎんだろ。おいお前ら」
舌打ちしながらも、男達へ指令を出す。
リーダー格らしい男が頷くと、ハンドサインを出しながら配置を変える。
左右に三人ずつ。出入口からくる敵を迎え撃つ。
数秒程経つとガンッ！　と音が響き、扉の中央が外から殴られたように形を歪に変えた。
何者かが扉を殴って破ろうとしている。
もう一度ガンッ！　と扉が歪む。
この扉は鋼鉄製だ。マシンガン程度の弾丸なら弾く強度を持っている。
それを殴って破れる力を持つ何か。もしや敵はＩＳ持ちではないかとリーダー格の男は思った。
と、次の瞬間、とうとう扉が弾け飛び、男達の脇を通過して壁に激突した。
「……ッ！」
一斉に引き金を引いた。

弾丸の嵐が扉の外へ襲い掛かる。もし相手が人間なら瞬く間に蜂の巣になる弾幕だ。
五秒程で嵐が止む。空の弾倉を交換してハンドサインを送り、それに従って二人の男が確認に向かう。
初めて本物の銃声を聞いた一夏は、絶望的な心境だった。
最初は助けが来たのかと喜んだのも束の間、よしんば本当に助けだったとしても今の銃撃で死んでしまっただろう。
また自分の所為。自分を助けに来たから死んだ。
二人の男が確認の為に出入口に近付いている。部屋の外には見るも無惨な光景が広がっているはずだ。
そう思っていた。確かに人間なら死んでいる。ＩＳでも持っていない限り無事では済まない。
いや、ＩＳ程度ならどれほどよかった事か。
弾痕だらけになった扉の外から〝影〟が飛び込んで来た。
「なん――……ッ!??」
確認しようと扉の近くにいた二人の男の片割れが真っ先に餌食となる。
男の急所、ゴールデンボールに正面から蹴りが炸裂した。白目を剥く男。痛みを感じる暇もなく一瞬で気絶したのは幸運か。

蹴りの体勢を戻しながら身体をクルリと右回転。その勢いのままもう一人の男の水月へ右肘鉄を叩き込む。
防弾ベスト諸共身体を衝撃が貫通した。
それでは足りないとばかりに〝影〟は、肘鉄の姿勢のまま拳を上げ、眉間へ裏拳の追撃。二人目が無効化。
ここで残り三人が事態を認識する。
上げられる二つの銃口。
〝影〟は慌てずに何かを投擲した。銃口を向けようとしていた二人の顔面に直撃。正体は肘鉄の祭に抜き取ったハンドガンの予備弾倉だ。
条件反射で思わず顔に手をやる二人。
引き金を引こうとしていた力が緩み、銃口の向きもズレる。
二人の間を走り抜けるように〝影〟がダッシュした。すれ違い様に両腕を水平に伸ばし、ダブルラリアット。
身体が空中を回転し、地面に仰向けで叩きつけられる。
三人目、四人目が無効化。
速度を緩めず最後のリーダーに向かう。
「おのガッ!?」

四人を無効化し、向かってくる〝影〟にハンドガンを向けようとした。
だが霞むような速度で一瞬のうちに懐へ入られてしまった。
そして下から振り上げられる拳。
華麗に決まるアッパーカット。打ち上げられた顎。脳が揺れて意識を奪い去る。
五人目が無効化。ここまで僅か四秒の早業だ。
そして、漸く〝影〟の動きが止まり、姿を鮮明に捉える事が出来た。
「テメェ、何もんだ？」
オータムの怒気を孕んだ声。
〝影〟の正体は人間、それもオータムと同じ女性だった。
ピッチリと肌に密着する黒のコンバットスーツ。その上から羽織るこれまた黒のロングコート。膝裏まで届く純金のような金髪。そして白い肌と金の双眸。
誰あろう。キイであった。
「何者？　わざわざ訊くのか？　だとしたら状況判断能力が低いな。反応も遅い。あの男達の上司らしいが、これなら反応出来た分まだあっちの方が優秀だな」
口を開けば炸裂する罵倒というか毒舌。
一瞬でオータムの沸点を振り切った。
「殺す！」

部屋を染める展開光。次の瞬間には、オータムの姿は激変していた。
四対の装甲脚を持つ第二世代ＩＳ『アラクネ』を纏った姿へ。
装甲脚の一本がキイへ振るわれる。
（危ない！）
叫ぶ事も出来ない一夏。
脳裏に浮かぶのは撒き散らされる血肉。ＩＳの力の前では、人間の身体など紙にも等しい。
オータムもそれを確信していた。自然と笑みがこぼれる。
だがキイは、振るわれた装甲脚を掲げた右腕の手の平で受け止めた。
「なっ⁉？」
目を見開くオータム。
キイは受け止めた装甲脚を掴むと、ミシミシと指をめり込ませてグイッと引っ張る。
そのままオータムを部屋の隅へ投げ飛ばした。
「ぐはっ……ふざけんな⁉？　テメェは本当に何もんだ⁉？」
投げ飛ばされたオータムは装甲脚で受け身を取り体勢を立て直すが、その声と表情は信じられないものを見たようになっている。
人間がＩＳを力づくで投げ飛ばしたのだ。普通なら絶対にありえない。

「まだ訊くか？　敵に決まっているだろう」
対してキイは声も表情もいたって冷静。笑みすら浮かべている。
それがオータムにとって余裕に映り、激情を更に煽る。
「調子に乗ってんじゃねぇぞ！」
四対の装甲脚が蠢き、八つの砲門がキイを狙う。
このまま撃てば一夏にも当たるが、既に人質云々の考えは頭からすっ飛んでいる。
たださっさとこの生意気な奴を殺す。それが頭を締めていた。
「死ね！」
響く銃声。轟く爆音。飛び散る金属片。
しかしその銃声はアラクネではない。
キイの両手にいつの間にか握られていた二丁の黒いリボルバーからだった。
爆音と金属片は、アラクネの装甲脚が破壊されたからだ。
「んなッ⁉？」
何度目の驚愕だろう。
見た目はただのリボルバーが装甲脚を破壊したのも驚きだが、抜く動作が全く見えなかった事だ。全ての装甲脚に攻撃された。ならば撃たれたのは少なくとも八発。
刹那の間にそれだけ連射した事になる。それが本当なら人間業ではない。

無論の事、キイが使う武器が普通であるはずがない。
このリボルバーの正体はレールガンである。名は〝シュラーゲン〟。必要な電力はキイ自身から供給され、マッハ十に迫る狂気染みた速度で弾丸を放つ超兵器。
弾丸自体もナノレベルで合成された特別製であり、結果ＩＳの装甲を破壊しうる威力を実現していた。
難点は引き金を引く瞬間に放電現象が起こり、発射の予兆がわかってしまう事だが、キイの早撃ちとマッハ十という速度が相まって欠点とはなりえない。
だがそんな事を知る由もないオータムにとって、今の状況は理不尽もいいところである。
先の銃撃で全部ではないが五基の装甲脚がイカれた。残り三基も無理に扱えば自壊するダメージだ。
（ふざけんじゃねぇぞこの私が⁉？　ＩＳを使ってただの人一人相手にッ⁉？）
「さっさと死にやがれエェェッッ！」
その事実がオータムを煽る。
彼女の気はとても短い。年下に呼び捨てされて一気に沸点を超えてしまう程に。
ならＩＳを使っている自分が生身の人間、しかもたった一人から良い様に翻弄されている現状に耐えられるはずがない。

残った装甲脚、両肩から伸びる二本の機械腕、両手にコールしたマシンガンを以って手当たり次第に乱射し始めた。

「全く粗い射撃だ」

しかしキイには当たらない。まるで弾道が見えているかの如く優雅に回避する。

それどころかオータムの乱射によって破壊され撒き散らされた壁の破片を弾いて飛ばし、一夏を拘束していた縄を切り裂く所業までやってみせた。

自由になった一夏を巻き込まれぬように肩に担いで回収する。

「おわっ、ちょっ、待っ……」

「口を閉じてろ。舌を噛むぞ」

再び回避行動。地面を滑るように移動しながらアラクネの懐へ迫る。

対するオータムは火力を前方へ集中。一夏諸共蜂の巣にせんばかりにキイの胸辺りを狙う。

その意図を銃口の向きと視線の動きから読み取ったキイは、弾道と地面の間へ飛び込む。

真上を通過する弾丸。

アラクネから一メートルの距離で慣性を重力制御によって殺し、危なげなく着地する。そして晒されたアラクネの胴体をメンタルモデルの脚力を以って蹴り飛ばした。

「グハッ⁉?」

トラックにでも轢かれたように吹き飛ぶアラクネ。そのまま壁を破壊しながら部屋の外へ飛んでいく。

数秒程の猶予を得たキイは、担いでいた一夏を部屋の隅へ降ろした。

「あの……」

「ここに居ろ。動かなければ安全だ。直に助けが来る。いいな?」

「は、はい」

「良い子だ」

一夏に柔らかく微笑む。踵を返すとアラクネが吹き飛び破壊された壁に向かって行った。

その背中を一夏は惚けたような表情で見つめていた。

浮かんだ感情は、かつて姉への羨望に似た、されど全く違うモノ。

一瞬で男達を薙ぎ倒し、ＩＳすらも圧倒する。自分を助け、心配ないと微笑んだ顔。

思い出す度に不思議な暖かい何かが胸の奥に灯る。

同時に沈んでいく意識。極限状態が過ぎ、安心して力が抜けたのだろう。

一夏は身を任せる事にした。あの人の心配はいらない。自分の心配など余計な御世話になる力をあの人は持っている。不思議と確信があった。

安堵の表情で意識を失う一夏だった。

◇　◇　◇

断続的なマルズフラッシュが薄暗い倉庫内を照らす。

両手のマシンガンと両肩の機械腕から弾丸を連射するオータムは、ひたすら苛立っていた。

どれだけ撃ち込もうと避けられる。

残像が出るスピードで、地面を滑り踊るような動作で、身体を僅かに逸らすだけで。

全ての弾丸を避けられる。

肉体的なダメージは殆どない。しかし精神的なダメージがオータムを蝕み続けていた。

ＩＳが人間一人に圧倒させる理不尽。ＩＳの攻撃を生身で受け止め、殴り蹴り飛ばす不条理。

夢、それも悪夢を見ている気分だ。

こんな事があって良いはずがない。何故自分が圧倒されている？　何故勝てない？

「戦闘中に余所見とは感心しないな」

「ッ!?」
現実逃避にも似た思考は、耳元に囁かれた声によって戻される。
そして後頭部に衝撃。またもや残量が減少するシールドエネルギー。
全ての元凶である張本人がアラクネの前に降り立つ。
「テメェ、良い加減にしやがれ!!?」
「何に対してだ？　言葉が足りないな」
降り立ったキイは余裕の表情。
その表情もオータムの苛立ちを助長させる。
「さて、もう十分か。そろそろ飽きたし、終わらせよう」
「上等だ！　オータム様を舐めんじゃねぇぞ!!?」
「舐める必要もないな」
ありがちな台詞を吐き、アラクネが突っ込んでくる。
タンッと床を打ち鳴らし、次の瞬間には向かって来ていたアラクネの目の前に現れる。
そのまま胴体へ拳を叩き込む。
正直キイは、これで決まったと思った。
だが実際には違うらしい。

グシャ！　と、金属のひしゃげる音。
狙ったのは胴体。胴体には装甲がなく、直撃したのならシールドエネルギーが発動するはず。ならこんな音はしない。
キイは、拳が受け止められたのを感じて感心の声を漏らす。
「ほう」
「捕まえたぜぇ！」
オータムはアラクネの残った装甲脚を以って、キイの拳を受け止めていた。
無事で済むはずがなく装甲脚は自壊寸前だが、確かに受け止めた。
ここで初めてキイが明確に止まったのだ。
両肩の機械腕から白い糸が射出される。
糸はキイに絡み付くと四肢に巻きつき、その身体を床に固定した。
「さぁ～て、調子に乗った礼をタップリさせて貰おうか」
嗜虐に満ちた目を向け、キイの顔へ手を伸ばす。
「まずはその綺麗な顔からだ。楽に死ねると思うなよ？」
手にナイフをコールするオータムを見て、危機のはずのキイは、ただ溜息を吐いた。
「はぁ。私の拳を受け止めたのには感心したが、所詮はその程度か」
「あぁ⁉？　テメェ状況分かってんのか⁉？」

「それはこちらの台詞だ。お前はお前の犯した失策に気づかないのか？」
問い掛ける様な言葉に、しかしオータムは理解出来ない。
この時のオータムの失策は二つ。
一つは、ＩＳを殴り飛ばし、破壊するパワーを持った相手に拘束という手段を取った事。
もう一つは、蜘蛛の糸と機械腕を繋げたままにした事。
「相手を縛っている状況を逆に利用されるとは思いつかなかったか？」
キイが腕を振るう。それだけで蜘蛛の糸は、いとも容易く千切れた。
「……はぁ!?」
「ほらほら、まだ終わってないぞ」
千切れた蜘蛛の糸を左手で掴み、力のまま思いっきり引っ張った。
そうなれば蜘蛛の糸と繋がっていたアラクネは、キイの元へ引き寄せられる事になる。
自分から向かってくるアラクネ。
その胴体へ、キイは、全力で拳を叩き込んだ。
たとえまた受け止められようと、諸共粉砕せんばかりに。
破城槌をも遥かに上回る破壊の権化がアラクネへ吸い込まれる。

「グッハァァァァァッッ!!?・!?・?」

これまでで一番の苦悶の声。

シールドバリヤーはおろか、絶対防御すら貫通して衝撃がオータムを貫通した。

流星のように殴り飛ばされたアラクネは、倉庫の壁を破壊しながら外へ飛び出す。本日二回目の壁破壊だ。

シールドエネルギーがとうとう尽きたらしく、ＩＳの反応が消失する。

キイは警戒を解いた。

おそらくもう戻ってこない。死んだわけではなく、オータムが所属している組織が撤退を指示するだろう。

もし戻って来ても人間がメンタルモデル相手に如何にか出来るとも思えない。

「……ふぅ」

一息つき、足を部屋の方へ向ける。中に戻れば一夏は気を失っていた。一夏を抱え、ナノマテリアルでシーツを作り出して床に敷き、寝かせてやる。

ずっと冷たいコンクリートの床に寝ててはは、身体的に悪いと判断したからだ。

既にあのＩＳを殴り飛ばして数分経つが、案の定戻ってこない。

蜘蛛ＩＳの事は意識から排除し、部屋から出て視線を倉庫の入り口へ変えた。

索敵に高速で接近するＩＳ反応を捕捉したからだ。

腰に手を回し、ホルスターから〝シュラーゲン〟を抜く。
暫くすれば倉庫の扉が斜めに切り裂かれ、一機の白いＩＳが飛び込んできた。
織斑千冬の専用機『暮桜』である。
ここからが本番だった。

◇　◇　◇

一夏が目を覚ました時、陽は既に沈みかけていた。
救急車の中らしい。窓からはドイツの軍人らしき人達が忙しなく動き回っているのが見える。
背に伝わるのは柔らかい感触。
どうやら自分はストレッチャーか何かに寝かされているようだ。
「目が覚めたか一夏」
横から声がかかる。
顔を向ければそこには姉である織斑千冬が居た。
「ち、千冬姉……」
「無理に起きるな。身体に異常はないが、精神的な疲れが酷いらしい」

身を起こそうとするが、千冬の手がそれを制する。
温順しく横になったまま話を続ける事にした。
「俺が気絶してどれくらいたった？」
「私が見つけた時点から約一時間だ。――すまない一夏、私の所為でお前が……」
「ちょ、どうしたんだよ千冬姉。らしくないって」
弱々しく涙まで浮かべる千冬に一夏は慌てる。
ふと視界に何かが映った。視線を向ける。
向けて、一夏は呆然とした。
「なんだこりゃ……」
正体は一夏が監禁されていた倉庫。正確にはだったものだ。
今や壁と屋根は穴だらけ。ところどころ斬られたような跡も見える。極めつけには、倉庫の一部が斜めにぶった斬られていた。
「ああ、あれか……ちょっとあってな」
一夏が呆然した事に気付いた千冬も、どこか遠い目をしている。千冬のみぞ知る事だが、少し冷や汗もかいていたりする。
と、突然、ハッと何かを思い出した一夏は千冬に詰め寄った。
「千冬姉！　俺の他に誰かいなかったか!!？　具体的には金髪金眼の超絶美人さん！

俺を助けてくれたんだ！」
「お、落ち着け一夏。それは今から話す」
一夏の勢いに珍しく千冬が押され気味である。どうどうと落ち着かせ、千冬は話し始めた。
「あいつは私が来たら直ぐに去ってしまった。素性も分からん」
「そう、か……名前は？　名前も分からないのか？」
その問いに千冬は、これは困ったと悩む。
一夏の状態にまさかと不審に思うが、名前くらいならいいだろうと結論付けた。
「……キイ。あいつはキイと名乗った」
「キイ…さん……」
何やら想うような表情になる一夏。
ああ、これはマジだと千冬は確信した。
姉として応援するべきなのかもしれないが、一夏の気持ちが自分が思っている通りのものなら、相当苦労するだろうと頭を抱える。
この時が、少年織斑一夏の初恋の瞬間だった。

chronicle. 6

幾本もの柱に支えられた半球型の屋根の白い洋風東屋。
周りには花が咲き誇る草原が広がっている。
東屋の中央には白いテーブルと椅子が三脚。三脚共、人が座っていた。
うちの一人、キイがもう二人に口を開く。
「概念伝達とはいえ、こうして会うのは久しぶりだな。ここ最近はこちらも色々忙しかった」
「そうね。と言うより定期的に連絡してくる貴女が変わっているのよ」
「人間の監視下で陸で暮らす私たちは、霧からも変わり者として認識されているし」
答えたのは、白衣に片眼鏡を掛けた科学者風の女性、霧の大戦艦ヒュウガ。そして、海のように蒼い髪を持つ、霧の重巡洋艦タカオ。
かつて４０１と共に共闘した二人である。
「しっかしキイ、貴女結構派手にやるわね。貴女が介入した織斑一夏誘拐事件、表沙汰にはなってないけど軍部ではてんてこ舞いよ」
「私は織斑千冬の戦闘データが欲しかっただけだ。織斑一夏を助けたのは、ただそれを

利用したに過ぎない。だからそれが原因で発生した後のことなど知らん」
「それで、貴女が直接動いて得たデータはどうだったの？」
一瞬だけキイは考えて、語り出した。
織斑千冬のＩＳ搭乗時に於ける戦闘能力は、零落白夜と言われる特殊能力も含め、最低でも駆逐艦以上。軽巡とも戦えるだろうが、千冬の戦闘スタイルとは相性が悪い。良くて防戦一方。負けはしないが勝てもしないというのが結論だ。
艦体無しのメンタルモデルが相手ならば戦闘可能。本気ではなかったとはいえ、キイとも真面に戦える。ただしクライン・フィールドがある為、勝つ事は不可能。
零落白夜を飛ぶ斬撃として放ってきたのは驚いたが、十分に対処可能な程度だ。
「ふ～ん、エネルギー消失能力の斬撃ね。これじゃクライン・フィールドは破れないわね」
「あれは私も不意を突かれた。公式の試合では直接斬る以外の使い方はしていなかったからな。ついクライン・フィールドを使ってしまった」
千冬としては切り札に近いものだったのだろう。
零落白夜の斬撃を弾いた時は、さすがに呆然としていた。クライン・フィールドの使用でメンタルモデルだと分かってしまい、そこで戦闘は終了したわけだが。
千冬も途中から薄々感付いていたらしい。それが決定的になり、双方共に戦闘を止め

た。

「割と楽しめたな。それなりのデータも採れた。有って損はないからな」

うんうんと満足そうな表情のキイ。キイはともかく、千冬からしたら堪ったものではなかっただろう。

途中からまさかとは思っていて、やはり予想通りの霧のメンタルモデル。蓋を開けてみれば超戦艦、しかもかつて警告を受けた本人ときた。

警告に触れる事でもやってしまったのか、それとも篠ノ之束（あのバカ）がまた何かやらかしたのか。冷や汗ものである。

そんな千冬の心理が理解出来たヒュウガが言う。

「無自覚にトラウマを与えるのは相変わらずね。まぁ変わりがないようで良かったわ。昔からそうよね貴女は。何年経過してもそこは変わらない」

まるで懐かしむように遠い目をし、何故か黄昏るヒュウガ。

そんなヒュウガをジッと見、ボソッとキイが言う。

「……ばばくさいなヒュウガ。歳でも取ったか？」

「ぶふぅーッ⁉？　誰がばばくさいだ誰が‼？　余計な御世話よ‼？　何よりメンタルモデルが歳を取るわけないでしょ‼？」

一瞬で雰囲気が崩れる。さっきまでの様子など何処へやら。ウガーと掴みかからん

ばかりの若干キャラが崩壊気味のヒュウガ。
　もしかしたら自覚してたのかもしれない。
「それで、お前の方はどうだタカオ。住む場所は別々とはいえ、千早群像と会っているんだろ？」
　ヒュウガをどうどうと抑えつつ、タカオに聞いた。
　頬を赤らめどもりながら答える。
「ど、どうって……べ、別に、普通よ。あの頃のまま。変わらないわ」
「なんだつまらん。とっとと気持ちだけでも伝えたらどうだ。人間の諺にも当たって砕けろという言葉がある」
「それってつまり玉砕しろって事よね？　いいのよ。……艦長にはあいつがいる。そこに私が入ろうとするのは無粋よ」
「つまりは意気地が無いと。情けないな。そろそろ乙女プラグインから大人プラグインに更新したらどうだ？」
「だからあんたは一言多い‼？　余計な御世話よ‼？　そんなんだから女子力ゼロって言われるのよ‼？」
　立ち上がりビシッ！　とキイを指差す。キイは何でも無いかのように返した。
「確かに私は女子力が無いに等しいらしい。中々調理も上手くならん。ならばいっその

事、武器にでも使うか。メンタルモデルに効果があるなら十分だろう」
「こいつとんでもない開き直りをしやがったよ、おい」
その辺はしょうがない。これがキイである。
この後も他愛のない世間話が続いた。タカオとキイの料理談、ヒュウガのアイデア披露、三人の生活内容など。楽しい時間だと感じる事が出来た。
だが本題はこれではない。キイはただ世間話をしに来たわけではないのだ。
そろそろ頃合と思ったヒュウガがキイに切り出す。
「それでキイ、本題は別にあるんでしょ?」
「その通りだ。我々霧の海洋封鎖が解けて十二年。なぁヒュウガ、タカオ」
一度言葉を句切り、キイは二人にこう聞いた。「今の世界はどうだ?」と。
「どうって、まぁ平和なんじゃないの。人間の社会も随分復興したし」
タカオの答えを聞いてキイは目を瞑った。続けてヒュウガが答える。
「私はイオナ姉様が居るならそれでいい。今も昔も変わらないわ。メンタルモデルはこれからどうなってしまうのか、どこに行き着くのか、それを知りたいというのも変わらないわね」
「なるほど。お前達のそれも一つの答えだ。なら今度は私の意見を言おう」
キイが目を開ける。そしてヒュウガとタカオは息を呑んだ。

覗く瞳は昔のそれ。かつてのキイ。霧の艦隊最強と呼ばれ、霧を率いる超戦艦の一隻として存在していた頃のキイだった。

ヒュウガもタカオも、かつての雰囲気が急に戻った事に息を呑んだのだ。

キイが、温かみの無い声色で口を開く。

「私は今の世界を快く思えない。なんなのだ今の世界は？　何故こうも変わる？　いや変わってなどいない。世界は戻っている」

「も、戻っている？」

凍てつかせる冷たさを宿した言葉に、なんとかタカオが疑問を挟む。

「ああそうだ。今の世界は『大海戦』より以前、我々が現れる前の世界に逆戻りしている」

海洋封鎖時の世界は、良くも悪くも実力主義の時代だった。

無能は生き残れない。生き残り、這い上がれるのは有能のみ。

霧の海洋封鎖で疲弊した世界では、何より大事なのがまず能力。政治も経済も軍事も、疲弊した世界で生き残るのに力が必要だった。そうすれば必然的に政府や軍部、企業などの各分野には有能な者ばかりが残る事になった。

誰もが世界の危機を認識し、必死になっていたからだ。

実際、生き残った企業の重役達は皆、叩き上げの軍人じみた雰囲気を纏っていた。

だから千早翔像や千早群像のような者も出てきたのだろう。

「それが今ではどうだ」

予兆自体は数年前から出ていた。それを決定的なものにしたのはＩＳの出現だ。

ＩＳ出現以来、世界は戻り始めている。軍や政府の上層部には、ただ地位だけの無能共が居座り。企業には賄賂や汚職が蔓延する。

「女尊男卑だと？　下らない。愚かしい。見るに耐えない」

キイがここまで負の感情を露わにするのは珍しい。

ＩＳの出現によって蔓延り始めた女尊男卑の思想。世界最強の兵器、インフィニット・ストラトス。ＩＳに乗れるのは女性だけ。ならば乗れない男より、乗れる女の方が偉いと言う考え方。現状はそこまで表立っていないが、これから更に加速するだろう。それこそ行き過ぎる程に。

今でも女尊男卑思想者の中には「メンタルモデルは女性を模している。それは霧も女性を特別視しているからだ」と、馬鹿な解釈をしている者までいるのだから。

こんな輩が現れる事こそが進んでいない証拠だ。

「文明が進もうと人間は進まず。私はかつて、千早翔像と千早群像に人間の輝きを見た。だがこれでは、その考えを改めなければならなくなってしまう」

淡々と己が意見を語るキイ。その様子や物言いに不穏な影を感じたのか、ヒュウガが真剣な表情で訊ねた。

「キイ、貴女いったい何を考えているの？」
「……こんなものなのか？　彼等が――千早翔像と千早群像が切り拓き、風穴を開けた世界とは」
　キイは答えず、尚も続ける。
「世界は破滅からは逃れたが、腐敗からは無理だったようだ。人間はどうやったら学ぶ。何故同じ事を繰り返す。これでは、彼等が成した事の意味がない。人間が戻る事を選択するなら、いっそ本当に戻してしまうのがいいのか？」
　キイの意図をタカオは理解出来ていない。
　だが元艦隊旗艦のヒュウガは気付いたようだ。気付いて、勢いよく椅子から立ち上がった。
「貴女……！　まさかとは思うけど……！」
「心配するな。今の段階ではあくまで最終手段だ。今は、だがな」
「え、ちょっとどういう事？　私にも説明して欲しいんだけど……」
　自分だけ置いてけぼりのタカオは困惑気味。
　説明を求めるが、キイは普段の雰囲気に戻り、ヒュウガはドカッと座り込んだ。そして大きく溜息を吐く。
「貴女の気持ちは分からなくもないけど、お願いだから私達やイオナ姉様達を巻き込ま

ないでね」
「無論だ。それくらい承知している」
「正直、前みたいに戻るのも悪くないと思う私もいる。でも、やっと変わった今の世界を戻してしまうのも、貴女が言う彼等が成した事を蔑ろにする行為だと覚えておいて」
「……心に留めておく」
「いやだから私にも説明を……」
「さて、そろそろお開きにしよう」
タカオの言葉を遮り、キイが立ち上がる。そして背を向けた。
「そうね。この後はコンゴウと?」
「ああ」
キイは肯定を返す。残った紅茶を飲みながら、ヒュウガは己が推測を語ってみせた。
「コンゴウにも同じ話しをするつもりでしょ。と言うより、交流がある全ての霧に」
「その通りだ。良く分かったな」
考えを見抜かれた事に顔だけ振り返る。
ヒュウガは得意げになってみせるが、直ぐに一点して真面目な眼差しを向けた。
「これでも大戦艦。それに長い付き合いだしね。――お願いだから良く考えてから行動して。貴女のそれは、今の霧を分裂させかねない」

「分かっているさ。言ったろう、あくまで最終手段と。私もなるべく実行したくない。人類次第だ」
「あの、お願いだから私も混ぜて？」
完全に蚊帳の外と化しているタカオ。
そろそろ涙目になってしまいそうだ。仲間外れは寂しいのである。
さすがに気の毒になったのだろう。ヒュウガが慰める。
「はいはい、後で教えてあげるから」
「結局後回しかい！」
訂正。慰めではなく面倒くさくなっただけだ。
だがある意味天然のキイは本気で悪いと思ったらしい。去ろうと背を向けていた身体を反転し、謝りだした。ただし一言余計に。
「すまないタカオ。少し感情に流され過ぎた。つい理解が早かったヒュウガとばかり話してしまった」
「だから一言多い！　――もういいわよ。私もムキになり過ぎたわ。でも後でちゃんと教えなさいよ」
キイのこれはもう慣れっこだ。毎度ツッコんでしまうが。
むしろ安心した。先の豹変には驚いたがやはり変わってはいない、と。

「では本当にお開きだ。また会おう。今度は直接」
「分かったわ。イオナ姉様も呼んで待ってるわ」
「厄介ごとは持ってこないでよ。会いにくるのはアンタくらいしか居ないし」
「近いうちに行くさ。その時はアタゴとイセも連れて来るか？」
「「いやちょっと待ってそれは――」」
二人が何かを言い切る前に、概念伝達は終了した。
数ヶ月後、本当に連れてきて一騒動あるのは余談である。

chronicle・7

ヒュウガ達及び、その後コンゴウや他霧の艦隊旗艦クラスのメンタルモデルと概念伝達を終えたキイ。

キイは今、自身の艦橋に膝を抱えて座り込んでいた。

普段の雰囲気は霧散し、何処かとても弱々しく見える。表情にも笑みはなく、浮かんでいるのは憂いを帯びたものだった。

「……」

原因は、今の世界。

ヒュウガにも語った、見るに堪えない世界の現状だ。

千早群像達が変えた世界。辿り着いた結果がこれでは、彼等が成した事の意味がなくなってしまう。

ヒュウガにはああ言われたが、これはあまりにも酷過ぎた。

「……私はどうすればいい」

〝人間が戻る事を選択するのなら、いっそ本当に戻してしまおうか〟

己が発言を思い出した。

やれなくはない。己単体でも可能だろう。だが実行した場合、全人類は勿論の事、同族である霧をも敵に回すことになる。

キイは身内を何よりも大切にする。仲間意識が強いのだ。むろん同族の霧に対しても。たとえ同じ霧が敵にまわろうと、キイは沈めることはしないだろう。

故に、同じ霧と敵対するのは望ましくない。

それにあくまで最終手段である。キイ自身もなるべく避けたい選択なのだ。

だが今の世界の現状を見てしまうと、そんな最終手段の実行まで考えてしまう。

それほどまでに世界は腐敗する一方だった。

「何故人間は、ここまで両極端なのだ……」

キイにだって人間を信じたい気持ちはある。

霧との会話の道標を切り開いたのは人間であり、それを実行し、実際に分かり合うことも出来た。

言わずもがな、千早翔像と千早群像だ。霧と知りながらも友達になれた刑部蒔絵もそうだ。姉ヤマトも人間を信じている。

しかし、ヤマト、ムサシ、キイの三姉妹が仲違いしてしまう原因を作ったのも、また人間なのだ。だが、三姉妹の和解が叶ったのも人間である千早群像のおかげときた。

いっそ人間全てを拒絶してしまえればどれだけ楽か。千早群像と言う人間を知って

いるからこそ、拒絶を許すことが出来ないのだ。
人間はバラバラ過ぎる。似通ったものが居たり、両極端だったりする。かつてのコンゴウ――変化に戸惑い拒絶したコンゴウも似た様な気持ちだったのだろうか？
人間について考えれば考えるほど、分からなくなってしまう。
もうキイの思考は滅茶苦茶だった。
「どうしたの？　キイ」
「……ヤマト」
そんなキイの様子に気付き、ヤマトが現れた。
膝を抱えて座り込むキイにヤマトは屈んで視線を合わせる。
キイは姿勢をそのまま呟くように言う。
「なあヤマト。私は人間を理解しきれない。今の腐敗し始めた世界は人間によるものだ。だが私は、千早群像のような人の輝きを見た。しかし世界を腐敗させているのは千早群像と同じ人間。何故だ？　何故人間は漸く変革した世界を台無しにしようとする？　何故人間は愚行を繰り返す？　人間にも千早翔像や千早群像、刑部蒔絵のように輝きを持つ者は居るだろう。だから分からない。こんなにもバラバラで、両極端な人間が――」
とうとうキイは、俯いて顔を膝に埋めてしまった。

「私には、分からない」

ヤマトは何時に無く感情が不安定になっているキイを見て、戸惑っていた。

「……キイ」

こんなキイはこれまでなかった。

ムサシを止められず、ヤマト（自分）を守れなくて絶望し、それでも最後には己が存在を賭けて挑み、姉妹を救った。女性に必要な女子力が無くて料理下手。姉妹思いで仲間思い。最強と呼ばれながらも何処か弱さを持つ、大事で可愛い私の妹。

そんなキイは今、答えを出せずに悩み苦しんでいる。

「本質は結局のところ兵器である我々には、やはり人間とは理解出来ない存在なのか？　人間に近付けても人間にはなれない。それが我々なのか？　駄目なんだ。考えるほど思考が複雑化してしまう。何度やっても答えが出せない」

キイは更に続ける。

「ヤマト。お前は何故、人間を信じられる？　私も人の輝きというものを信じたい。だが今の世界を見て、それが揺らいでしまう。教えてくれ。私では答えが出せない。私はどうすれば――」

言葉が途切れる。唐突に暖かい何かが自分を包んだからだ。

俯いていた視線を上げる。何かの正体はヤマトだった。ヤマトがキイを抱き締めて

いた。

負の感情に傾きかけていたキイを落ち着かせる様に頭を撫でている。

「落ち着いて。答えを焦ってはいけないわ。――キイ、かつてコンゴウがヒエイに言った言葉を憶えてる?」

頭を抱き締めたまま訊いてくる。

「……〝何処へ行き、何処へ帰るかは自分で決める〟、か?」

「そう。私は思うの。何処へ行き、何処へ帰るにしても合間の過程が必要だと」

「合間の過程?」

「コンゴウも変化を受け入れる為の時間、つまり過程が必要だった。ヒエイとムサシもそう。何かを為すには、為すまでの過程が必要なの」

「為すまでの過程……」

「今の世界や人間達は、きっと過程の途中なのよ。私は過程がどうあれ、最後に辿り着く結果が良いものなら、それは素晴らしい事だと思う。だから焦ってはいけない。過程だけを見て決めてしまっては駄目。過程を見守るのも必要なことよ」

抱き締めるヤマトと視線を合わせる。

その瞳には意志が戻っており、投げかける疑問の答えを待っていた。

「その見守った結果、行き着く先が最低のものだったらどうする」

「確かにいつも結果が良いものとは限らない。でもねキイ。過程の途中ならまだ変える事が出来る。やり直す事も出来る。そう望む存在は世界にも居るだろうし、出てくると思うわ。お父様やその息子の様に」

ヤマトの答えにキイは何か、胸にストンと落ちる感覚を覚えた。

「もう少しだけ、人の輝きを信じて。私達を生み、救ってくれたあの親子のような輝きを」

キイから弱々しさが霧散する。そして復活する正気と活力。

小さく、しかしはっきりとした意志と力を宿し、キイは言った。

「ああ、そうだな。そうしてみるよ。ありがとう、姉さん」

「どう致しまして。困っている妹を助けるのは当然よ。だってお姉ちゃんですもの」

答えを得たキイ。何時もなら立ち直り、堂々とした雰囲気に戻るところだ。しかし未だヤマトに身を任せている。

「ヤマト」

「何？」

「もう少し、このままで頼む」

珍しい頼みに驚いた表情になるヤマトだが、直ぐに笑みを浮かべてキイを抱き締めなおした。

「ええ、いいわよ。キイもムサシと同じく意外と甘えん坊さんなのかしらね」
「今だけだ。たまには悪くない」
暫し、二人だけの時間が続いた。
キイが「もう大丈夫だ」と言ってヤマトから離れる。立ち上がり、前を見据えた。
「ヤマトの言う通り、もう少し信じてみよう。――ヤマト、暫く艦隊の指揮を任せてもいいか？」
「任されたわ。何処かに行くの？」
「ああ。もう少し信じてみると決めた。なら先んじて今の世界のきっかけとなった者に会いに行こうと思う」
一度区切り、その名を言った。
「篠ノ之束のところだ」

丁度その頃。
『黒の艦隊』所属、海域強襲制圧艦ズイカク甲板上。
赤いレインコートにツインテールの少女の姿をしたズイカクとムサシが話し込んでいた。
「おいムサシ、いいのか？　お前もキイの姉だろ？」

「いいのよ。今回は私ではなく、お姉ちゃんが適任なの。私ではキイの悩みを分かってあげられないもの」

人間について悩むキイを何とか出来るのは、人間に理解があるヤマトのみ。

人間に対して無関心のムサシでは、キイを慰める事は出来ないのだ。

「お前は人間が好きじゃないもんな。私も昔はよく陸に上がって、獲った海産物で色々と交換して貰っていたが、最近じゃその機会もなくなった」

「貴女なにやってたの……。それにしてもキイのあんな弱々しい姿は初めてね。……ちょっと可愛い」

少しばかり頬を上気させて何やら危ない言動をするムサシ。元の病みの性質がそっちに傾いてしまったのだろうか。

「いろいろアウトだぞ」

「あら失礼。でも最近は私の妹化が進んできてるから、姉としてキイを慰めたかったわ。ただでさえ見た目からして妹っぽいのに……。なんでキイとヤマトはあれなのに私は……」

気にしてたのかと、ムサシを見て同情するズイカク。

ヤマトとキイは女体の理想の様な容姿をしており、身長も女の武器も大きい。ムサシにとっては割と問題だった。ムサシも十二分に可憐で美しく、そっち系の人が見れば一

発K・O・ものなのだが。
「あっ、でもキイの膝に乗れるし、ヤマトにも後ろから抱き締められるからいいかも」
「やっぱりお前が一番妹らしいよ」
同情して損したと思うズイカクだった。

◇　◇　◇

篠ノ之束は稀代の天才である。だが同時に夢を抱く一人の少女であった。
そんな彼女の夢とは、未知なる無限の宇宙へ飛び出すこと。その為に宇宙空間での活動を目的としたマルチフォーム・スーツ、無限の成層圏の名を持つインフィニット・ストラトスを開発した。
基礎理論、構想・開発は順調に進んだ。親友に内緒にしながら手伝ってもらったとは言え、当時中学生の少女がほぼ単独で開発したのだから、性格に難はあるがその頭脳は推して知るべしである。
ここまでは順調だった。だがいざ発表というところで失敗した。
普通に考えて中学生の少女が既存の常識を覆すパワードスーツを開発したなど、信じられるはずがない。

小娘の戯言、机上の空論と突っぱねられた。これがかつての霧の海洋封鎖の時代ならば違っていただろうが、すべては昔のこと。

ふざけるな。束は憤った。深く考えず、自分達が理解出来ないという理由だけで否定された。私の夢を否定された。

だから実力行使に出た。それが白騎士事件。結果としては上手くいった。霧に目をつけられたのは完全に予想外だったが。

だが予想は裏切られた。ＩＳは宇宙活動用のパワードスーツでは無く、元来の兵器を置き去りにする超兵器として認識されたのだ。

束は絶望した。ＩＳを兵器としてしまった世界に。

結局、親友やその弟、そして自分の妹以外はただの有象無象に過ぎなかったのだ。

既に完成していたＩＳコアを適当に各国に与えた。

そして束は世間から姿を消した。

もうどうでもいい。好きにしろ。こんな世界なんか知らない。

世界に絶望した束。ただ、ＩＳの開発だけは続けた。今のＩＳはまだまだ未完成。プロトタイプの白騎士だって第一段階に過ぎない。世界に絶望しても、夢を投げ出すのは嫌だった。

だから今もこうして続けているのだ。

いつか辿り着く、無限の宇宙(そら)を夢見て。

「う～ん、やっぱり永久機関を作るのは難しいな～」

一見無秩序に様々な機械が並べられた部屋。

そこには複数の投影モニターをうんうんと唸りながら、何か作業をしている一人の女性がいた。

「宇宙に出るならエネルギー問題の解決の為に永久機関は必要だよね～。でも中々進展しないしな～」

女性の名は篠ノ之束。

ＩＳを開発し、そして世間から姿を消した稀代の天才である。

ここはあらゆる国家から追われる身となった束が用意した、数ある研究所の一つだ。

姿を消した束は、複数用意した拠点を転々として逃げ延びている。

今、行っているのは永久機関の開発だった。

（エネルギーの増幅機能は大体完成したけど、永久機関には程遠い。何があるか全く予測不可能な宇宙に飛び出すなら、永久機関は絶対に必要。でも――）

「こんなに前途多難なんて予想外だよー。なんで霧の艦隊は縮退炉を標準装備しちゃってるのさー。理不尽だー」

ぐでー、とキーボードの上に突っ伏す。
流石の束もかなり苦労していた。なにせいきなりＳＦの出てくる様な永久機関を作ろうと言うのだ。
だが不可能ではない。それは霧の艦隊の存在が証明していた。
以前にちょっと政府のコンピュータをハッキングをした時に覗いたデータ。それによると霧の動力源は重力子機関（グラビトン・エンジン）、つまり縮退炉に類するものだ。
実際にあるのだから作れないはずがない。それが束の活力となっていた。
「霧と接触できたら一番近道なんだけど……無理だよね」
そんな考えが浮かぶが、すぐに否定した。
自分は霧の超戦艦に目を付けられている。元とは言え霧のトップ。その影響力は未だ健在だと思っていいだろう。ならば下手に霧へちょっかいを掛けて、アボンにでもなったりしたら洒落にならない。
「どうすればいいのかな……」
『いきなり難易度が高過ぎるのではないか？　まずは核融合炉あたりから初めてみれば』
「おおっ、なるほど！　その発想はなかった！　どんどん難易度を上げてって、積み重ねればやれるかも！」

『難点は時間がかかる事だな』
「そんな道理、束さんの無理でこじ開ける！　いぇい！　なら早速初めて――アレ？」
そこではたと気づく。
自分は誰と会話していた？　そもそも此処には自分だけしか居ないし、浸入出来るわけもない。百歩譲って出来たとしても束特製のセキリュティが働くはずだ。なら、誰だ。
バッ、と後ろを振り向く。誰もいない。
次は左右に。誰もいない。
真上、自分の股下。当たり前だが誰もいない。
再び正面を向く。あるのは展開された複数の投影モニター。モニターの一つに金髪の女が映っている以外異常はな……
「って、何ですと⁉？」
『やっと気付いたか。結構前から映ってたのだが』
普通に金髪の女が喋り出す。
束の顔から表情が抜け落ちた。冷たい声で問う。
「おまえ何なのさ？　束さんのコンピュータは有象無象共にハッキング出来るほど柔じゃない」

『そう思うのならおのずと答えは出るのではないか？』

そう言われ、考えを巡らせてみた。

天災（東）のコンピュータに容易く介入し、特製のセキリュティを自分に一切悟らせず突破する。

そんな事が出来る存在など、束が知る限りではただ一つしかいない。

「まさか……霧の艦隊？」

『正解だ』

「ならば改めて自己紹介をしよう」

「わひゃあッ⁉？」

その声は目の前のモニターではなく、背後から聞こえた。

驚きのあまり椅子から跳び上がり、床に尻を打ち付けてしまう。

痛む臀部を摩りながら振り向けば、

「私の名はキイ。『黒（THE BLACK FLEET）の艦隊』旗艦（フラグシップ）、超戦艦キイだ。よろしく」

優雅に一礼をする、今の今までモニターに映っていた金髪の女――キイがいた。

何時からいた？　て言うか何処から入った？　て言うか何しに来た？

などなど疑問が浮かぶが、重要なのはそこじゃない。束にとって重要なのは、彼女の名だった。

「キ、キイって……あの時の……」

「あの時が白騎士事件を言うなら、その通りだ」

束は自分の身体が僅かに震えているのを自覚した。

霧の艦隊は興味深い存在ではあるが、同時に恐怖を抱いてもいる。

きっかけは横須賀市湾内のかつて霧の大戦艦二隻が沈んだ場所をバレないように調べた時だ。いや、正確には調べようとした、である。

なにせ沈没位置の数キロ手前で断念したのだから。

十数年経った現在でも、未だ沈没位置から半径数百メートルには重力異常と空間変異が。半径数キロ間には重力場の不安定化が続いている。中心部にいたっては無闇に近付けばあの世逝きというレベルだった。爆発の場所がもう少し陸に近かったら吹っ飛んでいただろう。

こんな現象を永続的に起こすなんて、一体どうやったら。そう束は思ったのだ。霧の艦隊に興味を、同時に恐怖を抱いた瞬間だった。

そんな存在の、元とはいえトップが目の前に立っている。しかも前に一度、警告を告げられた相手。知らぬ内に何かやってしまったのだろうかと、不安になってしまう。

ましてや自分に彼女に対する抵抗手段など皆無。いくら細胞レベルでオーバースペックと自称する自分でも、メンタルモデルに勝てるわけがない。

なにせメンタルモデルは、彼女が目指す完成系でもあるのだから。
「そこまで怯えられると、さすがに少しショックだな」
一方のキイは、束の震えた身体を見て若干ショックを受けたようだ。
「取り敢えず今お前をどうこうする気はない」
「ホ、ホント？」
「嘘を言ってどうする」
一応安心したようで、束がホッと身体から力を抜く。そして立ち上がり、椅子に座り直した。
「で、話を戻すけど。霧の超戦艦が何の用？　私としてはあの警告は破ってないと思うけど」
「その通り。今回は警告とは無関係。私の個人的な行動だ」
素っ気なく肯定された。
警戒心ＭＡＸの束も何だか拍子抜けする。
だから冷静になれた。改めて目の前のメンタルモデルをまじまじと見る。
女性の理想とも言える肢体に鮮やかな金髪と金色の瞳。顔立ちも人間離れして端麗で、まるで人形の様にも思えてしまう。
ただし服装に少し違和感を感じる。

肩と胸元が露出し、所々に白いフリルが彩られたロングスカートの黒いドレス。両手には同じく白いフリル付きの黒長手袋。ここまではいい。ただその上からこれまた黒いロングコートを羽織っているのが違和感の正体だ。

自分も機械のウサ耳に不思議の国のアリス風のドレスという変わった服装だが、彼女も大概である。

「ねえ、私が言えた事じゃないけど、服ミスマッチ過ぎない？」

「そうか？　これはこれで長年着ているもので気に入っているんだけどな。それにロングコートは、内側に武器を隠し易い」

「まあ私が気にしても意味ないか。――それで、結局何の用なの？」

そろそろ焦ったくなってきたので、単刀直入に訊いた。

キイは何ら雰囲気を変えず、逆に問いを投げかけた。

「なに、簡単だ。ただお前に聞きたい事があっただけだ。篠ノ之束、お前は何故インフィニット・ストラトスを作った？」

「え？　何故って……。それを聞く為にわざわざ来たの？」

「そうだ。私にとっては重要な事だ。今後を決める為に、な」

予想外の質問に戸惑ってしまう。

キイは続けた。

「今の世界は女尊男卑などというくだらない思想に傾きつつある。その原因となっているのがＩＳだ。元から兆候はあったとはいえ、ＩＳがその起爆剤となったのは明らかだ」

一瞬、思考が真っ白になる。束の中で何かが燻り始めた。

「私は今の世界を快く思っていない。世界は腐敗の一方を辿っている。それに拍車をかけているのはＩＳだ。見るに堪えない。確かに我々から見てもＩＳの性能は画期的と言える。だがそれで人類は調子に乗り、世界を腐敗させる尖兵となって――」

何かが弾けた。キイの言葉を遮って束が叫んだ。

「違う！　私はそんな事の為にＩＳを作ったんじゃない!!?」

「……なら何の為に作った？」

怒りの感情の爆発に驚いたキイだったが、激昂する束に真剣な表情で問い直した。

束から怒りが一気に引く。そして暫く沈黙してから、俯き気味にポツリポツリと語り始める。

自分が抱いた夢。何の為にＩＳを作ったか。何故白騎士事件を起こしたか。

本来なら〝あの〟篠ノ之束がここまで本心を言葉にする事などありえない。他の有象無象に何の価値も見出せないあの束が。

だが目の前の彼女、キイは違う。霧の艦隊、その中でも最上位たる超戦艦級。有象無

象などではなく、散々異端と呼ばれた自分と同じ特別な存在。
だからなのだろう。親友の千冬のように、本心を言えたのは。
「これがＩＳを作った理由だよ。認めて貰おうと思って白騎士事件を起こしたのに、実際には兵器としか認められなかったんだから。しかも結果的に霧の艦隊にまで目を付けられちゃって、こうして自分の首を絞めてる。ホント、笑っちゃうよね」
束は自嘲するように言った。
私の夢を、彼女はどう受け取るだろうか。あの有象無象共のように否定するのか、馬鹿にするか、不可能だと断定するのか。
「フッ、ハハハハ！」
果たして彼女は、笑っていた。それは盛大に。
やっぱり無理か。期待してたけど無駄だったらしい。私の夢を理解出来るのは、やっぱりちーちゃん達だけだ。そう思いかけた時、キイが哄笑が止んだ。
「いいな。面白い」
「……、……え？」
「人間に相応しい馬鹿げていて壮大な素晴らしい夢だ。篠ノ之束、お前は何も間違っていない。どんな夢を抱くのも自由。ならばそれを実現しようとするのも自由だ。そうしてこそ人間。それこそが人間。嗚呼、嬉しかな！　ここまで笑ったのは久しぶりだ

！」

再び満面の笑みで哄笑する。

だが束はそれを気にするどころではなかった。

思いもしなかった肯定。本心からそうであると、湧き上がる感情のまま笑う様子を見れば分かる。

理解されないと思っていた。馬鹿にされると思っていた。不可能と言われると思っていた。また否定されるのを何処かで恐れていた。

しかし、どうだ。理解してくれている。肯定してくれている。素晴らしいと、認めてくれている。

「……ああ」

それが荒んでいた束の心を癒した。何か心に温かいものが宿るのを感じた。

「……ん？　どうした？　泣いているぞ」

「え？　アレ、なんで……」

言われ、初めて気づく。目元に手をやり涙を拭おうとするが、止まらず溢れ出してきた。

それほど嬉しかったのだろう。いつしか束は、声を上げて泣いていた。

「お、おい、どうした？　なぜ泣く？　何かしたか？」

泣く束を前にオロオロとするキイ。
誰かに泣かれるなんて初めてなのだ。どうしていいか分からない。
割と急いで対処法を模索する。結果、姉ヤマトを見習う事にした。
「ふぇ?」
束の頭を抱き締めながら慰めるように撫でる。束は目をパチクリとしていたが、暖かさを感じて身を任せるのだった。
数分後、泣き止んだ束は顔を紅潮させながら、キイと座って対峙していた。
泣いたり抱き締められたりと、束も恥ずかしかったらしい。
「オホン、いやいや束さんとした事が。ありがとね、キーちゃん」
「キーちゃん? ああ、キイだからか。礼を言われるような事をした覚えはないが」
「あるよ。私の夢を理解してくれて、私の夢を肯定してくれて、私の夢を認めてくれて。本当に、ありがとう」
深々と頭を下げる。
そんな束を見て、キイは思った。ヤマトの言う通り、信じてみてよかった、と。
キイは束に見失いかけていた人の輝きを見た。まるで千早群像のように、個人に過ぎた夢を抱いて実現しようとする姿。
(私こそ礼を言いたいくらいだ。人間も捨てたものではない。久しく忘れていたな)

成果は十分に得た。輝きを持つ人を見れただけで満足だ。
「ああ、本当に、よかった」
「ん？　何か言った？」
「いや、何でもない」
キイの返しに束は深く追求しなかった。今更ではあるが、気になっていた事があるのだ。
「ねぇキーちゃん。結局、何の為に私にＩＳを作った理由を訊きに来たの？　ただ訊いて終わり、ってわけじゃないよね」
「ああ、最初に言った通り、私はＩＳこそが世界の腐敗の要因と思っていた。その製作者は、何を思ってＩＳを作り、世界を変えたのか気になっただけだ。まぁぶっちゃけ、答えによっては一斉砲撃も視野に入れていたんだが」
「怖っ⁉？　超戦艦の一斉砲撃とかマジで洒落にならないからね⁉？　やらないでね？　ふりじゃないからね⁉？」
「随分とテンションが変わったな。心配するな。お前の夢の為に作ったというなら問題はない。今の世が望むものでないのなら尚更だ」
目に見えて、と言うか大袈裟に胸を下ろす。
キイが呆れる程、束はハイテンションになっていた。

「面白いなお前。個人的に気に入ったし、まぁある程度の頼みなら出来る範囲で訊いてやる」

キイは身内に甘い。それはそれは甘い。もし助けを求められたら、『黒の艦隊』全艦を率いてフル装備で向かうくらい。

束もその中に入ったという事だ。

「え？　ホント⁉？　じゃあ縮退炉とか超重力砲とか侵蝕兵器とか調べさせて‼？」

「ある程度と言ったろう。話を聞いてたか。ちゃんと分かってるかボケ兎？」

「キーちゃん毒舌⁉？」

この辺は変わらないが。